

小学校高学年・中学校
道徳の時間における教育相談の
手法の活用に関する考察

平成 18 年 2 月

岡山県教育センター

まえがき

国の小・中学校教育課程実施状況調査や国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2003）、OECD生徒の学習到達度調査（PISA2003）の結果分析により、読解力や知識・技能を幅広く活用する力、学ぶ意欲等が十分身に付いていない状況が明らかになり、それらの育成、向上が課題として指摘されています。また、中央教育審議会においては、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」のバランスのとれた育成、義務教育の内容・水準の担保など、義務教育の使命の明確化及び教育内容の改善についての検討が進められています。このような状況の中で、これからの学校教育には、これまで以上に質の高い教育の実現を目指した取り組みが求められており、具体的な指導方法や指導体制等の改善についての研究・実践を深めるとともに、教員一人一人が自らの資質・指導力の向上を図ることが重要となってきます。

そこで、岡山県教育センターでは、教育に関する専門的、技術的事項の調査研究、教育関係職員の研修、教育相談、教育情報の収集・蓄積・発信等の諸事業を通して、学校教育の支援を行っています。特に、調査研究においては、国の教育改革の動向と本県の教育課題を踏まえ、幾つかの研究主題を設定して共同研究・個人研究を行い、その成果の提供と普及に努めています。

さて、[生きる力]の核となる豊かな人間性や社会性などをはぐくむことを目指した道徳教育は、体験を生かしたり家庭・地域と連携したりすることによって改善されつつあります。しかし、小学校高学年・中学校では、児童生徒の道徳の時間に対する興味・関心の低下する状況があり、一層の工夫・改善が必要になっています。

本研究では、小学校高学年・中学校における道徳の時間の改善を図るため、指導方法等の工夫について考察しました。道徳の時間の充実しにくい原因を探った後、その授業改善に向けて、教育相談の手法を活用する工夫について検討しました。その結果、指導上の留意点を明らかにした上で、予防的、開発的教育相談の手法を中心資料として活用する工夫、話し合いを促進するために活用する工夫を提案します。

御高覧の上、御意見、御批判をいただくとともに、学習指導要領の趣旨に沿う教育実践のための資料として御活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、この研究を進めるに当たり、御協力をいただきました協力委員の先生方並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成18年2月

岡山県教育センター所長

浮田 信明

目 次

研究の要旨	1
I はじめに	2
II 研究の目的	2
III 研究の内容	3
1 小学校高学年・中学校における道德の時間の改善に向けての視点	3
(1) 児童生徒が道德の時間に感じる不満	3
(2) 道德の時間の多様化に向けての前提	4
(3) 児童生徒の発達段階	4
(4) 道德の時間の指導過程	5
(5) 体験活動等の活用	6
(6) 多様化に向けての視点	7
2 予防的, 開発的教育相談の手法の活用	7
(1) 予防的, 開発的教育相談とは	7
(2) カウンセリングマインド	8
(3) 予防的, 開発的教育相談の手法の特徴	8
(4) 構成的グループエンカウンター	8
(5) 中心資料として活用する工夫	10
(6) 話し合いを促進するために活用する工夫	12
IV 実践事例について	12
1 実践事例1	13
2 実践事例2	13
3 実践事例3	13
4 実践事例4	13
《実践事例1》	14
《実践事例2》	18
《実践事例3》	22
《実践事例4》	26
V おわりに	30

小学校高学年・中学校道徳の時間 における教育相談の手法の活用に 関する考察

目的

小学校高学年・中学校における
道徳の時間の授業改善

研究内容

改善に向けての視点

児童生徒の不満と発達段階



道徳の時間を多様化するための三つの視点

発見・実感

共に考える

体験的な活動

道徳教育  教育相談

提案

予防的、開発的教育相談の手法の活用

中心資料として
活用する工夫

話し合いを促進する
ために活用する工夫

研究の概要

本研究では、小学校高学年・中学校における道徳の時間の改善を図るため、指導方法等の工夫について考察した。まず、小学校高学年・中学校において道徳の時間の充実しにくい原因を探った。次に先行研究を踏まえ、授業改善に向けて予防的、開発的教育相談の手法を活用する工夫について検討した。その結果、指導上の留意点を明らかにした上で、中心資料として活用する工夫、話し合いを促進するために活用する工夫を提案した。

キーワード 小学校高学年, 中学校, 道徳, 教育相談, 体験的な活動, 構成的グループエンカウンター

I はじめに

平成10年7月の教育課程審議会答申では、将来を担う子どもたちに「生きる力」の核となる豊かな人間性や社会性などを一層はぐくむことを目指して、道徳教育改善の基本方針が次のとおり示された。

- ① 体験活動等を生かした心に響く道徳教育の実施
- ② 家庭や地域の人々の協力による開かれた道徳教育の充実
- ③ 未来に向けて自らが課題に取り組み、共に考える道徳教育の推進

この3点を踏まえた小学校学習指導要領・中学校学習指導要領が告示され、小・中学校における道徳教育は徐々に改善されてきている。多くの小・中学校で道徳の時間の授業時数が確保されるようになったことをはじめ、その授業では、総合的な学習の時間や特別活動での体験活動を生かしたり家庭や地域の人をゲストティーチャーとして招いたりするようになった。これらの工夫・改善によって児童生徒の心に響く道徳教育が推し進められようとしている。

ただし、小学校高学年・中学校では、道徳の時間の充実に向け、発達段階を考慮した工夫が更に必要である。その根拠の一つになるのは平成15年度道徳教育推進状況調査の結果である¹⁾。この調査の間8では、「貴校において道徳の時間を『楽しい』あるいは『ためになる』と感じている児童生徒はどの程度いると思いますか」と尋ねている。その回答では、「楽しい」「ためになる」と感じている児童生徒の割合を「ほぼ全員」「3分の2くらい」とする学校は、小学校低学年は87.9%と高いが、次第に減少し、中学校第3学年では39.7%まで低下する(表1)。

表1 道徳の時間を「楽しい」あるいは「ためになる」と感じている児童生徒の割合

(単位 %、一部抜粋し合計を加筆)

区 分		ほぼ全員	2/3くらい	合 計
小 学 校	低 学 年	43.4	44.5	87.9
	中 学 年	24.7	52.1	76.8
	高 学 年	16.9	43.8	60.7
中 学 校	第1学年	10.3	39.5	49.8
	第2学年	7.6	33.2	40.8
	第3学年	7.6	32.1	39.7

この結果から、上級学年の学級担任ほど道徳の時間を「楽しい」「ためになる」と感じている児童生徒が少ないと考えていることは明らかである。また、それは上級学年になるほど道徳の時間を「楽しい」「ためになる」と感じている児童生徒が減少することを示唆している。なお、この減少傾向は前々回、前回の調査でも顕著であった。

このことから、本研究では、小学校高学年・中学校の児童生徒にとって「楽しい」「ためになる」道徳の時間にするための工夫を探ることにした。そして、新たな試みを探る視点を、道徳教育と同様に心の在り方についての教育であり、体験的、作業的手法を用いることによって成果を挙げている予防的、開発的教育相談に求めた。

II 研究の目的

本研究では、小学校高学年・中学校において道徳の時間の充実しにくい原因を探り、その授業改善のため、予防的、開発的教育相談の手法を活用する工夫を検討し、指導上の留意点を明らかにした上で具体的な活用事例を提案する。

Ⅲ 研究の内容

1 小学校高学年・中学校における道徳の時間の改善に向けての視点

小学校高学年・中学校における道徳の時間の改善を図るため、児童生徒の道徳の時間に対する意識や発達段階を確かめ、それらを踏まえた改善の視点を探る。

(1) 児童生徒が道徳の時間に感じる不満

金井ら（1997）は全国の小・中学生（約4,000人）を対象として道徳の時間に関するアンケート調査を行っている²⁾。その結果によれば、小学校高学年・中学校の児童生徒が道徳の時間を「楽しくない」と感じる理由として、最上位になったのは「いつも同じような授業だから」という回答である。小学校高学年では、中学年に比べて17.3ポイント上昇し51.7%となり、半数を超えている。中学校の各学年でも約半数の生徒がこの項目を選んでおり、他の上位の回答である「こうすることがよいことだとか、こうしなければならないということが多いから」「資料や話がつまらないから」より20ポイント程度多い。また、この3項目が最上位であることは小学校高学年でも同様である（表2）。

この調査結果から、次のような示唆が得られる。

まず、道徳の時間の指導過程や方法等が画一化、固定化している可能性が高いことである。これは、道徳教育の研究者からしばしば指摘されているこ

とでもあり、その指摘を裏付けるものになっている。特に小学校高学年・中学校の場合、既に4年間以上にわたって、「いつも同じような授業」であったのならば、児童生徒の道徳の時間に対する興味・関心は高まりにくい。他教科においては、発達段階や学習内容に応じて、様々な指導過程や方法等が工夫されているのに対して、工夫が十分ではないと指摘されても仕方ない面がある。また、近年は道徳の時間の授業時数が確保されるようになったことを前述したが、指導過程や方法等の多様化が図られないままに授業時数が確保されるのであれば、児童生徒の興味・関心は更に低下しかねない懸念が起きる。

次に、児童生徒にとって道徳の時間の学習指導が道徳的価値の押し付けのように感じられがちになっていることである。現在の主流である価値伝達型などと呼ばれる授業（inculcation）の課題とされてきた点であり、指導過程や方法等の画一化、固定化とかかわりが深い。

最後は、道徳の時間に用いられる資料が児童生徒の興味・関心に合っていないかたり現実離れしていたり、あるいは、ねらいとする道徳的価値のあまりに明快に描かれすぎていたりしている場合が多いことである。このことから資料についても工夫する必要のあることが明らかである。

児童生徒の道徳の時間に対する不満からは、道徳の時間の指導過程、方法及び資料の多様化という改善に向けての視点が得られる。

表2 道徳の時間が「楽しくない」理由（複数回答）

（単位 %，小学校の一部と中学校を合わせた）

理 由	校 種 ・ 学 年		中 学 校		
	小 学 校	中 学 校	第1学年	第2学年	第3学年
友達の意見を聞いてもあまり役に立たないから	18.8	14.5	11.9	10.4	10.2
始めから分かっていることしかないので感動したり、考えたりすることが少ないから	40.6	24.1	24.0	20.6	22.7
こうすることがよいことだとか、こうしなければならないということが多いから	26.6	37.2	30.6	26.3	27.1
自分が本当に知りたいことが学べないから	29.7	21.4	20.2	18.2	16.2
自分には関係ない話だと思ってしまうから	25.0	22.8	20.0	19.5	16.8
自分の将来や生活の仕方を考えることができないから	15.6	6.2	8.1	7.2	5.4
資料や話がつまらないから	28.1	32.4	26.4	32.1	32.1
いつも同じような授業だから	34.4	51.7	49.4	54.4	53.2
その他	18.8	2.8	9.0	7.7	6.6

(2) 道徳の時間の多様化に向けての前提

道徳の時間の多様化に向けて小学校学習指導要領においては、「体験活動を生かすなど多様な指導の工夫、魅力的な教材の開発や活用などを通して、生徒の発達段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」と示されており、この配慮事項は中学校学習指導要領においても同様である。

そして、小学校学習指導要領解説道徳編（1999、以下「小学校解説」という。）には、その具体的な工夫として、「興味の喚起や動機付けの工夫」「資料の活用の工夫」「表現の工夫」など、そして節を改めて「多様な資料」がそれぞれ例示されている³⁾。この点も中学校学習指導要領解説道徳編（1998、以下「中学校解説」という。）において同様に示されている。

また、平成14年度から全国の小・中学校児童生徒に配付された心のノートの活用も道徳の時間を多様化させる手だての一つになる。

これらの様々な工夫の中でも、特に小学校高学年・中学校における道徳の時間の充実につながるものを児童生徒の発達段階を考慮した上で探ることが必要である。

その際、前提となることがある。永田（2004）は、多様化に際して、道徳の時間の特質を生かすよう努める必要があるとしている。その特質とは次の3点である⁴⁾。

- ① 子ども一人一人が自己を見つめる時間
- ② 子どもが価値を内面的に自覚する時間
- ③ 子どもが主体的に道徳的実践力を身に付けていく時間

そして、この3点を「ストライクゾーン」とたとえている。例えば、体験活動を生かすことを考えたとき、特別活動や総合的な学習の時間で行うべき体験活動をそのまま道徳の時間に取り入れ、1単位時間の授業の最初から最後まで体験活動を行うことは、道徳の時間の特質から考えれば、ふさわしくないことになる。道徳の時間は、児童生徒の道徳的実践力をはぐくむ時間であり、道徳的実践を行う時間ではないことをしっかりと認識することが必要である。

「ストライクゾーン」の3点に共通していることは、道徳の時間は学習者である子どもが主体に

なるのだということである。それは、価値伝達型の授業の具体的な改善の方向を指摘していることになる。

(3) 児童生徒の発達段階

- ① 小学校高学年と中学校との発達段階の類似点、共通点

小学校解説及び中学校解説それぞれの「2 道徳性の発達と道徳教育（2）道徳性の発達」には、児童生徒の発達段階について示されている。小学校高学年児童と中学校生徒について、それぞれの特徴をまとめて次に示す^{5) 6)}。

小学校高学年児童

- 第二次性徴期に入るため、ときには精神的な不安定を招く場合がある。
- 知的能力においては、抽象的、論理的に思考する力が増し、行為の結果とともにその動機をも十分に考慮できるようになる。
- 価値観には理想主義的な傾向が強く、自分の価値判断に固執しがちである。
- 自律的な態度が発達し、自分の行為を自己決定しようとするのに伴い、批判力もついてくる。

中学校生徒

- 人間の生き方への関心が大きくなり、よりよく生きたいという願いが強くなる。
- 身体的な大きな変化を経験し、自己像が大きく揺れ動く。
- 中学生の自己探求と自己確立の過程は、他律から自律への過程でもある。
- 教師や親の影響力は小さくなり、仲間集団が大きな影響を与えるようになる。そして、仲間集団の言葉や評価を強く意識するようになる。それが自己嫌悪につながったり自尊心の高揚につながったりする。

両者を比較すると、まず、「第二次性徴期」と「身体的な大きな変化」とが類似している。これは、児童生徒が着実に大人に向かって成長しているあかしである。しかし、当の本人たちにとっては、周囲の友達と異なっている自分を意識し、精神的な不安定につながることもある。さらに、「仲間集団が大きな影響を与える」ことがその不安感

を増すことにつながりやすい。この「仲間集団が大きな影響を与える」ことは、中学校の段階として示されている。しかし、その徴候は、小学校高学年において既に顕著になっていることから考えると、中学校と同様に人前で自分の意見や考えを発表しにくくなる要因になっていることが分かる。そのため、道徳的価値についての自分の意見や考えの表出を求められる道徳の時間においては、その抵抗感をできるだけ少なくし、「共に考える」ことを促すための工夫が必要になる。

次に、両者に共通して自律的態度の発達に関する記述がある。家庭教育や4年間以上にわたる道徳教育によってある程度の道徳的実践力が定着していることから、教師からの安易な教え込みでは道徳的価値について、なかなか理解、納得できそうにないことがうかがえる。つまり、児童生徒が自分自身で自分なりの道徳的価値を創造、発見するような、あるいは実感するような授業づくりが求められることになる。

② 小学校第5学年という節目

現在、全国において校種間連携や小・中一貫教育が研究されている。その取り組みにおいては、児童生徒の発達段階が改めて検討され、小学校第5学年に一つの節目を設定しているケースが多い。例えば、幼・小連携を研究している岡山大学教育学部附属小学校では、ピアジェやセルマンなど複数の心理学研究に基づき、発達段階を小学校第1学年、第2学年～第4学年、そして高学年と3期に分けてカリキュラムを構築している。

また、小・中一貫教育を研究している呉市立五番町小学校ほか(2005)では、児童の身長伸びについての1950年度児童と現在の児童との比較調査及び女子の平均既潮率の変化に関する調査を行っている。その結果では、約50年前に比べて児童の身体的な発達の1年以上早くなっていることが明らかになっている。また、児童生徒に対するアンケート調査の結果では、第5学年において自尊心の著しい低下が見られ、以降中学校第3学年まで続くことも詳述されている⁷⁾。安彦(2004)は、この調査結果に基づき、小学校高学年においては、授業における児童への働き掛けを「内発的動機づけを中心にするに変え」ることの重要性を説いている⁸⁾。

また、川島(1997)は複数の心理学研究に基づ

き、10歳前後の年齢を社会性の発達における節目と見ている。10歳前後までは「いろいろな道徳的な価値について、その場で正しいかどうかの判断をまわりの大人に委ねる段階」とし、10歳前後からは「判断の基礎として自分自身の行動の基準を獲得する時期」ととらえている⁹⁾。

これらの調査結果、指摘及び児童生徒の「自律的態度が発達する」ことから、小学校高学年からの道徳の時間においては、道徳的価値を教えることが中心になる授業から道徳的価値について児童生徒自身で考えることが中心になる授業へと進む必要があるということが考えられる。

これは、もちろん現在の道徳教育の目標においても、「道徳的価値の自覚」と示されているように、これまでも目指されてきたことである。しかし、なかなか難しいことでもある。それは、人前で自分の意見や考えを発表しにくくなることにより、授業の展開段階における話し合い活動が不活発なまま終末を迎えることの多い道徳の時間の現状から明らかである。

(4) 道徳の時間の指導過程

① 一般的な価値伝達型授業

現在の道徳の時間における一般的な指導過程、つまり「いつも同じような授業」と児童生徒に指摘されるものを確認しておく(図1)。画一化、固定化が指摘されてはいるが、その長所は生かした上で、短所を補うよう工夫を図りたい。

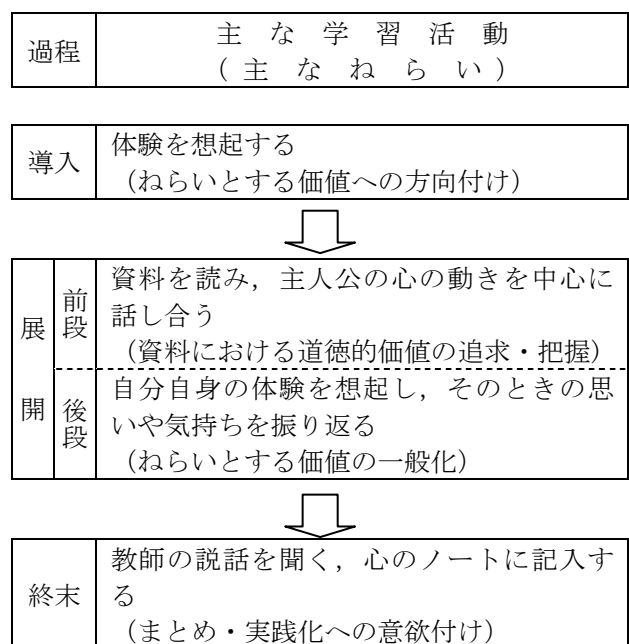


図1 道徳の時間の一般的な指導過程

読み物を中心資料とした価値伝達型授業の長所としては、まず、教師のねらいとする道徳的価値を明確にした授業にしやすいことが挙げられる。また、物語・小説等の中心人物の心情や判断を話し合うことにより、道徳的価値についての自分の考えを間接的に表現すればよいということも長所と言える。さらに、多種多様な追体験が可能になることも大きな長所である。例えば、日常生活において感動的な体験はしばしばあるものではないが、物語や小説を読むことによって、その追体験がいつでも可能になる。

一方、その短所としては、基本的に道徳的価値の教え込みという面が強く、指導が形式的になりやすい、また児童生徒にとっては受動的な授業になりやすいということが挙げられる。そして、児童生徒の多くが、「こうすることがよいことだとか、こうしなければならないということが多い」と感じているようであれば、教師の一方的な説論が中心になっている徳目注入型などと呼ばれる授業（indoctrination）に陥っているおそれがある。

また、指導しようとする道徳的価値が簡単に分かってしまったり現実的でなかったりする読み物資料では、児童生徒が積極的に参加しないという傾向があることも短所である。

これらの短所はそのまま現在の道徳教育の課題となっている。

② モラル・ジレンマ型授業

前述の課題に対して、一つの解答となったものが、L. コールバーグの提唱したモラル・ジレンマ型授業である。日本においては、荒木紀幸らによって研究、実践が進められた。日本の道徳の時間に導入された当初は、認知的要因のみに注目していることや二者択一という手法に対して異論も多く出た。しかし、現在は小学校高学年・中学校において道徳的判断力を育てるための授業として広く定着している。

このモラル・ジレンマ型授業で重視されているのは、モラル・ディスカッションと呼ばれる討論である。この討論において人間性への理解を深めたり役割取得能力を育てたりすることが道徳性を培うことにつながっている。

ここにも、小学校高学年・中学校の道徳の時間を改善する視点が示唆されている。つまり、道徳的価値についての話し合い・聴き合いの重視であ

る。これもまた「共に考える」道徳の時間を実現させるための工夫である。

(5) 体験活動等の活用

① 体験活動等の活用を図る

もう一つ、道徳の時間の改善に向けた視点として体験活動等の活用について述べる。「I はじめに」で述べたように、総合的な学習の時間や特別活動における体験活動を生かした道徳の授業が行われるようになりつつある。さらに、各教科や領域と組み合わせた総合単元的な道徳学習も小学校を中心として広まっている。これは、現代社会の様々な変化により、児童生徒の道徳性の発達に深くつながる自然体験や社会体験などが不足しがちであるという教育課程審議会の指摘に基づき、小学校学習指導要領・中学校学習指導要領において、体験活動等の長所を生かし児童生徒の心に響く道徳教育の実施が求められているためである。

体験活動等の活用は、児童生徒の興味・関心を高めるよう道徳の時間の多様化を図った工夫でもある。本研究においても、体験活動を生かしたり体験的な活動を取り入れたりするという改善の視点を重視する。

② 体験、体験活動及び体験的な活動の定義

本研究における体験、体験活動及び体験的な活動の定義を次に示しておく。

○ 体験

日常の家庭生活や社会生活において経験するもの。直接的、個別的、偶発的である。

○ 体験活動

学校の教育課程の中において行われる意図的、計画的な学習活動。ただし、個別的、偶発的要素も多い。例えば、山や川に出掛けるなどの自然体験や高齢者施設訪問などの福祉体験などがある。

○ 体験的な活動

道徳の時間や学級活動の時間などにおいて行われる学習活動。体験活動と同様に意図的、計画的に行われる。個別的、偶発的要素はいくらかあるが、相対的には低い。例えば、人間関係づくりにつながる教育相談の手法によるもの。また、役割演技、アイマスク体験や情報モラル体験などの疑似体験などがある。

ただし、読み物教材や視聴覚教材などによる

間接体験は含めない。

③ 体験活動等の長所

体験活動等の長所を次に簡単に述べる。J・デューイの言葉である「^な為すことによって学ぶ」は、この長所に基づいている。この長所を生かして、児童生徒の心に響く道德教育の実現を図る必要がある。

- 人の認識は自分の体験に基づくことが多いので、物事を理解しやすい。
- 体験には実感が伴い、物事を納得しやすい。

④ 体験活動等の短所

体験活動等には短所もある。それを次にまとめる。学習活動を計画、実施する際には、これらの点を十分に配慮する必要がある。

- 個別的、偶発的であることが多く、個人による認識の差が生じやすい。同じ活動であっても一人一人の感じ方は異なっている場合がある。
- 感覚的な認識であるため、知的認識に比べて、不確実であることが多い。
- 主観的要素が強いため、独善に陥ることがある。また、物事の認識が局所的であったり一方的であったりすることもある。

また、総合的な学習の時間や特別活動における体験活動のうち、校外で行うものについては、計画的、継続的な取り組みがより多く必要になり、簡単には実施しにくいということがある。そして、その体験活動の内容は、常に道德の時間と関連付けることを図ることができるものでもない。つまり、総合的な学習の時間や特別活動における校外での体験活動を道德の時間に生かす工夫だけではなく、日常的な道德の時間に体験的な活動を取り入れる工夫が必要になる。

(6) 多様化に向けての視点

ここまで述べてきたことから、道德の時間の多様化に向けての視点を次のようにまとめた。

- ① 児童生徒が自分自身で自分なりの道德的価値を創造、発見するような、あるいは実感するような授業づくりを行う。

- ② 道德的価値について「共に考える」ことを重視し、児童生徒が話し合い、聴き合う際の抵抗感をできるだけ少なくする。

- ③ 大掛かりでなく、準備が比較的負担にならない体験的な活動を導入する。

この3点をまとめて一言で述べるならば、「学習活動に体験的な活動を取り入れたり、本音の話し合い・聴き合いを重視したりすることにより、児童生徒の自発的な気付きを促す学習指導」であり、本研究においては、このような学習指導を目指している。

このような取り組みは、各教科・領域において幾つも存在しているが、道德教育と同じ「心の教育」の一つである学級活動においては、予防的、開発的教育相談の手法を用いて前記と同様の学習指導を行い、多くの成果を挙げている。また、道德の時間においても以前から心理学的手法である役割演技が取り入れられ、道德的価値の認識を深めることにつながっている。

そこで、本研究では、予防的、開発的教育相談で用いられる手法を道德の時間に導入することを試みることにした。

2 予防的、開発的教育相談の手法の活用

ここでは、予防的、開発的教育相談についての概略を示した後、その手法の特徴をとらえ、最も広まっている手法を例に挙げて道德の時間への導入を検討する。

(1) 予防的、開発的教育相談とは

学校に取り入れられた教育相談は、本来、一人一人の子どもの持つ悩みや困難の解決を援助することが重視され、非社会的、反社会的傾向のある児童生徒への個別指導の一つとして位置付けられていた。

このような治療的教育相談に対して、児童生徒の自己実現を援助するという、より積極的な機能を持つものは、予防的、開発的教育相談と呼ばれている。治療的教育相談は、様々な問題が顕在化、深刻化している特定の児童生徒を援助の対象としていることに対して、予防的、開発的教育相談はすべての児童生徒を対象としている。そして、それぞれの問題が顕在化、深刻化しないよう援助したり、自分で問題に気付き自分で解決する力を育

成したりすることを目指している。

(2) カウンセリングマインド

教育相談において基本となるものにカウンセリングマインドがある。このカウンセリングマインドには様々なとらえ方があるが、ここでは、相手を受容し共感しようとする態度や精神のことであり、掛け替えのない存在として尊重することととらえる。

現在、このカウンセリングマインドは、学校教育の全般にわたって求められており、特に道徳の時間には不可欠なものである。道徳の時間では一人一人の感じ方・考え方の交流が中心となることから、教師と児童生徒及び児童生徒同士の間関係の影響が大きいためである。カウンセリングマインドに基づき、その人間関係を豊かにし、受容的で共感的な学習の雰囲気をつくり出すことが必要である。

カウンセリングマインドに基づいた道徳の時間にするための具体的な留意点を次に示す。

① 児童生徒の言葉をよく聴くこと

児童生徒の応答を適否だけで決め付けることなく、「なるほど、そうか」などとうなずいて、そのままを受け止めたり、その応答の大事な部分を繰り返して返したりすることである。また、二者択一の発問は避け、開かれた発問を行うことも児童生徒の言葉をよく聴こうとすることである。

② 児童生徒の気持ちを理解しようとする

児童生徒の様々な発言、表情や態度の背景にある気持ちを理解しようと努める。例えば、児童生徒の沈黙にも様々な意味があることを踏まえて、対応したい。

③ 教師自身が誠実であること

教師自身も児童生徒と同様に、道徳的に完全な存在ではない。道徳的価値について児童生徒と「共に考える」誠実な態度が必要である。また、その道徳的価値にかかわる教師自身の経験や考え方を進んで自己開示することは、児童生徒の学習活動を促すことにもつながる。

なお、これらの留意点については、体験的な活動の導入の有無にかかわらず、常に心掛けるようにしたい。

(3) 予防的、開発的教育相談の手法の特徴

予防的、開発的教育相談の手法を生かした学習活動には様々なものがある。学級活動等において、近年広まりつつあるもののうち3種を例に挙げる。

- 構成的グループエンカウンター
(Structured Group Encounter, 以下「S G E」という。)
- グループワークトレーニング
- プロジェクトアドベンチャー

これらの目指すものは、それぞれ独自のものであり、プログラムも異なっている。しかし、共通していることが二つあり、この種の手法の特徴となっている。

一点目は、体験的な活動が中心になっており、そこで受けた実感や気付きを重視していることである。その名称はエクササイズ、ワーク、アクティビティなどと異なっているが、内容は似通っているものが多い。また、ゲーム的な要素も多く含まれ、活動を促進するように工夫されている。

二点目は、その体験的な活動で受けた感じや気付きを振り返ったり分かち合ったりする話し合い、聴き合う活動がセットになっていることである。この活動において、互いの本音を語り合い、認め合うことが、自分の得た認知を拡大、修正することにつながっている。

(4) 構成的グループエンカウンター

① S G Eとは

前述した3種の手法のうち、S G Eを取り上げ、その概略について述べる。

この手法は、参考となる文献が多く出版されており、小・中学校において既に広く活用されている。なお、後述する本研究における実践事例もS G Eの手法を取り上げ、工夫している。

國分康孝によって提唱されたS G Eは一定の枠組みの中で、リーダーの指示により、心理的課題であるエクササイズを用いたグループ活動を行い、自己理解や他者理解等、人間関係を促進することをねらった心理学的な教育方法である。比較的安全性が高い上に、エクササイズが幅広く、また、目的や時間に応じて教師の創意工夫を生かしやすいなど、活用の図りやすい手法でもある¹⁰⁾。その効果は広く認められており、予防的、開発的教育

相談の手法として最も普及しているものの一つになっている。

② SGEのねらい

SGEはグループでの体験的な活動を通して、行動の変容と人間的な成長をねらっている。様々なエクササイズを持つ具体的なねらいとしては、次のようなものがある。

- ア 自己理解
自分自身は何なのかを理解すること
- イ 他者理解
他者の考えや行動を理解すること
- ウ 自己開示
自分の考え、感じ方、自分自身についての気づきを他の人に伝えること
- エ 自己受容
自分で自分のことを肯定的に受容すること
- オ 信頼体験
友達の考えや行動を信じて生活できること
- カ 感受性の促進
心の苦しさや喜びを共感的に感じる

③ 道徳の時間との類似点と相違点

道徳の時間とSGEは、いずれも児童生徒の心の在り方についての教育であるとともに、その指導過程が似ている。その一般的な指導過程を次に示し(図2)、再掲する図1と比較する。

道徳の時間における展開の前段では読み物資料

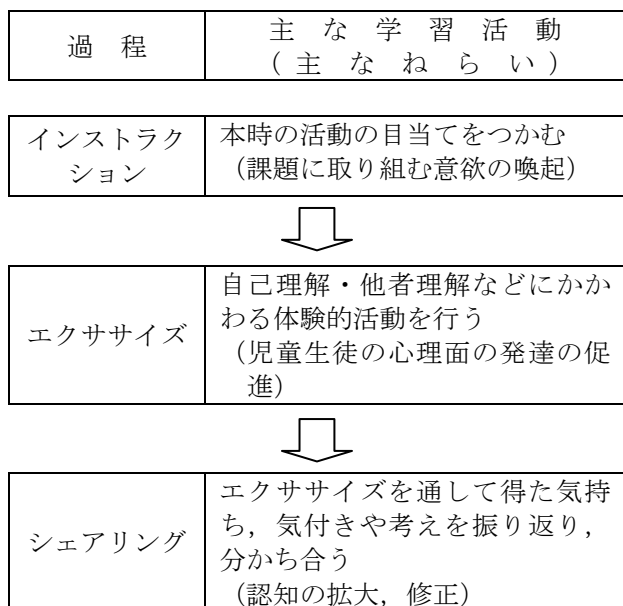


図2 SGEの一般的な指導過程

(視聴覚資料)を通して間接体験(追体験)を行い、SGEの展開ではエクササイズによる直接体験を行う。そして、いずれも振り返って得た感じや気づきを交流することによって、心情や理解を一層深めていくことをねらっている。

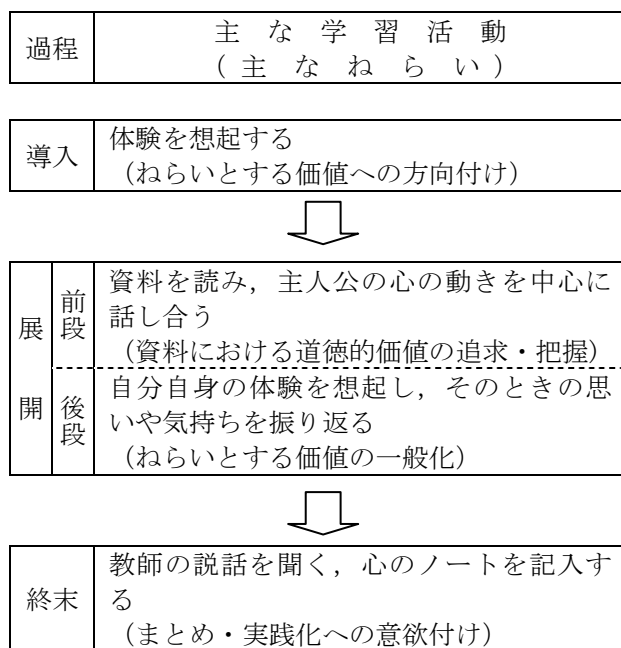
一方、その相違点は学習活動の振り返りの在り方である。

道徳の時間における展開の後段では、読み物資料などから得た道徳的価値について、児童生徒自身の過去の関連する体験を振り返り、重ね合わせることによって道徳的価値の一般化を図る。つまり、このとき、児童生徒全員が教師のねらいとした道徳的価値の自覚に迫れるよう工夫することになる。

一方、SGEではエクササイズ後、今、ここで感じたことや考えたことを振り返り、分かち合うことによって、自己理解や他者理解などを図る。そのため、一人一人の感じ方、考え方が異なることそのものを互いに理解し合うことになる。つまり、行った体験的な活動についてはオープンエンドということである。このオープンエンドであることが道徳の時間への導入を図る際の大きな課題となる。

④ 道徳の時間への導入に際しての留意点

前述したように、SGEは学校教育の様々な場面で活用されている。道徳の時間においても同様に試みられ始めている。



再掲図1 道徳の時間の一般的な指導過程

その推進者である諸富（2002）は、SGEには、自己肯定感をはぐくんだり人間関係づくりの力を育てたりする効果があるとした上で、道德の時間に導入するメリットとして、次の2点を挙げている¹¹⁾。

- 道德的価値の大切さを、観念ではなく、からだごとリアルに実感できます
- 子どもが楽しく、イキイキと授業に取り組みます

そして、その留意点としては道德の時間のねらいを踏まえることを繰り返し強調している。共に豊かな人間性や社会性を育てる心の教育であり、かかわりが深いと考えられることから、SGEの体験的な活動をすればよいと安易に考える授業者が多いことがうかがえる。

また、一部に見られる実践では、道德の時間においてSGEを行うために内容項目を曲解しているのではないかと考えられるようなものまで存在している。

しかし、前述のようにそのねらいは異なっていること、SGEはオープンエンドであるということから考えれば、体験的な活動を行えば、ねらいとする道德的価値に迫れるというものではない。むしろ、ねらいをはっきりさせず、オープンエンドで終わるならば、児童生徒は、道德的価値を自覚することなく、単なる「いつもと違って楽しかった」という感想を持つだけで、終わりがちになる。そのため、児童生徒が道德的価値を意識できるよう短い読み物資料や心のノートなどの併用を薦めている。

このことについては、他の予防的、開発的教育相談の手法を活用する場合においても同様のことが言える。

本研究の実践事例においては、短い読み物資料や心のノートは必ずしも用いていないが、道德の時間のねらいを明確にすることは重視している。

(5) 中心資料として活用する工夫

① 道德の時間における資料の要件

道德の時間における資料の役割は、児童生徒一人一人に、思考する対象となる事象についての情報を共有させることである。

児童生徒はそれぞれ、家庭や生活体験が異なっ

ている。そのため、ある事柄に対する考え方・感じ方も異なっている。また、同じ言葉、例えば、「生命尊重」という言葉に対して思い浮かべる具体的なイメージも一人一人異なっている。

このような違いを踏まえて、生活体験等の共有化を図るものが資料である。

体験的な活動を道德の時間の資料とするとき、読み物資料と同様の具備すべき要件がある。

小学校解説には、道德の時間における資料について具備すべき要件として次の5点を挙げている。

- ア 人間尊重の精神にかなう資料
- イ ねらいを達成するのにふさわしい資料
- ウ 児童の興味、発達に応じた資料
- エ 多様な価値観が引き出され深く考えさせられる資料
- オ 特定の価値観に偏しない中立的な資料

なお、中学校解説にも同様の要件が示されており、さらに「カ 読み物、視聴覚教材などの特質を生かした資料」が追加されている。この点を本研究に当てはめるならば、体験的な活動の特質を生かした資料ということになる。

また、小学校解説には、次のような要件を具備するような資料を選択するよう心掛けることとされている。

- ア 児童の感性に訴え、感動性の豊かな資料
- イ 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられる資料
- ウ 生や死の問題、人間としてよりよく生きることの意味などを深く考えさせられる資料
- エ 体験活動や日常生活等を振り返り道德的価値の意義や大切さを考えさせられる資料
- オ 多様で発展的な学習活動を可能にする資料

中学校解説でも、同様の要件が示されている。道德の時間に体験的な活動を中心資料として導入する際には、上記の要件を満たすものであることも考慮する必要がある。

② 活用の可能性

SGEなど予防的、開発的教育相談の手法としての体験的な活動には、道德的価値にかかわる要素が含まれているものが多く、児童生徒が自分自

身で自分なりの道徳的価値を創造、発見するような、あるいは実感するような授業づくりの工夫に活用できるものが多い。例えば、自己理解・他者理解を目的とした「いいところ探し」や「ありがとうカード」は、小学校高学年の1-(6)「個性の伸長」での活用が考えられる(表3)。この体験的な活動は、相手を褒めることによって相手にどのような働き掛けとなるかという振り返りの視点を持たせることにより、小学校高学年の2-(2)「思いやり・親切」などで活用も考えられる。また、信頼体験を目的とした「クリスマスツリー」「トラストホールド」などは、小学校高学年の2-(3)「信頼・友情」での活用が考えられる。

なお、小学校解説に紹介されているアイマスク体験は、SGEにおいても「トラストウォーク」などの名称で取り入れられている。

③ 指導上の留意点

ア ねらいの明確化

その体験的な活動を行うことによって、どのようなねらいを達成しようとするのか。それを教師自身が明確に意識し、導入やインストラクションの際に、児童生徒にはっきりと伝えることである。これをしないと、児童生徒の意識がねらいと外れた方向に向き、何の学習が分からなくなるおそれがある。読み物やビデオ等の資料と同様、体験的な活動はねらいを達成するための手段である。

また、道徳の時間に用いる副読本の中に、聴き方のスキルを身に付けることを目的にしたエクサ

サイズを取り扱うものなどがあるが、このような資料の取り扱いについては十分な注意が必要になる。道徳の時間は行為を指導する時間ではない。つまり、様々なスキルを身に付けることが目的になってはならない。もしスキルの定着をねらうのであれば、例えば学級活動においてなされるべきものである。何らかのスキルを身に付ける過程で得た感じや気づきに注目させ、道徳的心情や判断力、意欲や態度をはぐくむことに道徳の時間の特質がある。

イ 予防的、開発的教育相談の手法としての留意点

SGEなどの予防的、開発的教育相談の手法を用いた学習活動を行う際の留意点は、道徳の時間において行う際にも配慮する必要がある。例えばSGEの場合、「このエクササイズはやりたくない」などと抵抗を示す児童生徒の出現する場合がある。授業を構想する段階で児童生徒の実態を把握しておくことがまず大切になる。それでもこのような児童生徒が現れた場合、参加を促しながらも基本的には無理強いをしてはいけない。見学を勧めて振り返りに参加を促すようにする。

また、信頼体験を目的とした体験的な活動の場合、身体的な接触を伴うことや安全性についての配慮を怠ることはできない。さらに、書籍等で紹介されている、いじめを模擬体験するなどのエクササイズは、その実施において実感を伴いやすく、心の傷付き体験などにつながりかねず、十分な配慮が必要である。

表3 道徳の時間の中心資料として活用する体験的な活動の具体例

名称 (主なねらい)	活動内容と留意点	道徳の内容項目
いいところ探し (自己理解・他者理解)	○互いのよいところをジェスチャーや言葉で伝え合う活動。伝えられてどんな気持ちか、感想を話し合う。 ・伝える立場、伝えられる立場の両方の感じや気づきを大切にする。 ・「互いによく努力しているものを見付けよう」など、伝えられた本人が自分のよさを一層伸ばそうと思えるような内容や見付け方を促す。	小学校高学年 1-(6) 個性の伸長 2-(2) 思いやり・親切 中学校 1-(5) 個性の伸長 2-(2) 感謝・思いやり
クリスマスツリー (信頼体験)	○グループ全員が協力し合って、一つの小さな台の上に乗る。達成感を味わうとともに協力することの大切さを話し合う。 ・身体的な接触を伴うため、児童生徒の実態を把握した上で行う。SGEなどの体験的な活動に慣れてから行うことが望ましい。 ・大きく動くことがあるため、周囲に物が無い、広い場所で行うようにする。	小学校高学年 2-(2) 思いやり・親切 2-(3) 信頼・友情 中学校 2-(2) 感謝・思いやり 2-(3) 信頼・友情 4-(1) 集団生活の向上

表4 話し合いを促進するための活用の具体例

名称 (主なねらい)	活動内容と留意点	道徳の内容項目
何でもバスケット (自己開示・他者理解)	○フルーツバスケットの形式で、個人やペアで活動。ゲーム性が高く、様々なテーマの質問を設定することによって、活動を通した相互の理解を図りやすい。 ・質問の出題は、「私は〇〇〇ですが」というアイメッセージで始める共通した形式にすると自己開示を促進しやすい。	小学校高学年の2－(3)「信頼・友情」などにかかわるものもあるが、ねらいとする道徳的価値に沿って話題などを設定することにより、いずれの内容項目でも活用を図ることができる。
アドジャン (自己開示・他者理解)	○数人のグループでジャンケンを行い、その指の数の合計であらかじめ設定された質問に答えていく活動。 ・あらかじめ質問が示されていることにより、ねらいに迫る設定がしやすい。また、ゲーム性が高く、自己開示や相互の理解につながる質問を通してグループの親和性を高めやすい。	

(6) 話し合いを促進するために活用する工夫

① 活用の可能性

道徳の時間は「自己を見詰める時間」であり、「他者との交流の時間」としばしば言われている。つまり、自己を見詰めることによって生まれてくる本音を他者と語り合い、聴き合う交流活動により、児童生徒一人一人が自分なりに道徳的価値を創造していく時間になるということである。

予防的、開発的教育相談の手法では、中心となる体験的な活動に取り組む前に和やかな雰囲気づくりのため、ごく短時間でウォーミングアップを行うことがある。これらの中には、その道徳の時間のねらいとする道徳的価値にかかわりを持つものが見受けられる。例えば、信頼・友情にかかわるものとしては「何でもバスケット」などがあり、これを道徳の時間の導入時に行うことにより、話し合い、聴き合う活動への好影響が期待できる。

また、展開段階での活用も考えられる。小学校高学年・中学校では、前述したように人前で自分の意見や考えを発表しにくくなるため、最も不活発になりやすい場面である。そこで、自己開示につながるエクササイズの活用を図りたい。「何でもバスケット」のほかに「アドジャン」などがある(表4)。

② 指導上の留意点

自己開示につながるエクササイズには、ゲーム的な要素を含んだものが多い。幾らかの体ほぐしとリラックスした雰囲気とが、児童生徒の本音の交流を促す。しかし、その一方で、ねらいとする道徳的価値に対して直接的には結び付かない要素も含むようになる。そのため、児童生徒の話し合い、聴き合う活動に際しては、机間指導を繰り返

し、話題がそれたまま時間の経過することのないよう助言していくことが大切である。

また、発言の指示は、容易にできるものから始めて、次第に道徳的価値について深まりの期待できるものとすることに留意が必要である。

さらに、予防的、開発的教育相談の手法における振り返り、分かち合いは、「みんな違って、みんなよい」という傾向が強いものもあり、道徳的価値の自覚に迫るためには、教師の意図的な切り返しの発問をいかに有効に行うかということが重要である。

IV 実践事例について

本研究では、4名の協力委員による予防的、開発的教育相談の手法を活用した道徳の時間の実践事例を挙げた。いずれの実践においても、前章までに述べた三つの視点に基づき、「中心資料として活用する工夫」「話し合いを促進するために活用する工夫」を具体化している。

また、いずれの授業者も展開の後段では、「どんな新しい自分に出会いましたか」という発問を行っている。これは、岡山県道徳教育研究会による近年の継続的な実践研究を参考にしたものである。この研究会では、道徳的価値の内面的な自覚を深める道徳の時間を「子どもにとって前とちがった自分(新しい自分)を見つける(出会う)ことのできる時間」ととらえている¹²⁾。このとらえ方は、本研究での多様化の視点「児童生徒が自分自身で自分なりの道徳的価値を創造、発見するような、あるいは実感するような授業づくり」の参考ともしている。

授業実践後には、いずれの協力委員も児童生徒の

学習活動に取り組む様子、応答及びワークシートの記述などから授業改善への手ごたえを感じ取っている。本研究は、これらの実践から多くの示唆を受けた。ここでは、それぞれの概略を紹介した上で、授業者とは異なる視点から若干の考察を行う。

1 実践事例 1

この実践事例では、小学校第5学年の道徳の時間において予防的、開発的教育相談の手法を「中心資料として活用する工夫」として具体化している。ねらいとする内容項目は3-(2) 生命尊重である。

道徳の時間に予防的、開発的教育相談の手法を導入しようとするとき、この二つのねらいが近ければ近いほど円滑な学習活動を構想しやすい。このことから考えると、S G Eの場合は、自己理解や他者との触れ合いを目的として行われる学習活動であるため、道徳の時間では内容項目1「主として自分自身に関すること」や、内容項目2「主として他の人とのかかわりに関すること」について利用することが考えられる。しかし、この実践事例では、内容項目3の「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」においても、中心資料として活用する手掛かりを得ることができた。

2 実践事例 2

この実践事例では、小学校第6学年の道徳の時間において予防的、開発的教育相談の手法を「中心資料として活用する工夫」として具体化している。ねらいとする内容項目は2-(2) 思いやり・親切である。

「思いやり・親切」は重点目標の一つであることから、2単位時間で構想されている。第1時は高齢者疑似体験を中心資料としており、同日中に行われた第2時は、その疑似体験で受けた感じや気づきに基つき、「ランキング」という活動を行った。現在、小学校低学年から中学校第3学年に至るまで、道徳の時間は1主題1単位時間扱いが標準的である。つまり、1主題複数時間扱いも指導過程を多様化する一つの工夫になる。

なお、第2時の「ランキング」では、児童に対して、高齢者と接するとき大切にしたいと思うことを問うているが、具体的な接し方、つまり行為についての指導ではなく、相手を思いやる態度をはぐくむことをねらっているものである。

3 実践事例 3

この実践事例では、中学校第2学年の道徳の時間において予防的、開発的教育相談の手法を「話し合いを促進するために活用する工夫」として具体化している。ねらいとする内容項目は2-(1) 礼儀である。

道徳の時間において、読み物・視聴覚資料がない、体験的な活動もしないという試みになっている。中心資料は総合的な学習の時間においてなされた職場体験学習である。一般的に体験学習は個別的、偶発的要素が多い。そこで、ねらいとする道徳的価値についての経験の共有化を図るため、児童生徒の作文などを中心資料として用いることが普通である。しかし、この場合、いずれの事業所においても、生徒に対して礼儀を重視した指導を行っていることから、経験の共有化は行われていると考えられる。そこで、道徳の時間においては、体験学習を想起させ、目当てを十分に把握させることに留意した上で、礼儀について話し合い、聴き合う活動を中心としている。

4 実践事例 4

この実践事例では、中学校第2学年の道徳の時間において予防的、開発的教育相談の手法を「話し合いを促進するために活用する工夫」として具体化している。ねらいとする内容項目は2-(3) 信頼・友情である。

実践事例2と同じく1主題2単位時間扱いとなっている。第1時は、自主班研修活動での互いのよさを認め合う学習活動を行い、第2時では、友情をテーマとした読み物資料を中心資料として行われている。

固定化された友人関係の枠組みを越えて、互いのよさを認め合うことが友情について考えるきっかけになり、また親和的な雰囲気をつくり出している。この親和的な雰囲気が、第2時の読み物資料を用いた授業のよさを一層生かすことにつながっている。

なお、この指導過程は、伊藤啓一の提唱している統合的プログラムに通じるものがある。統合的プログラムとは、受容・創造をねらいとする授業と伝達・納得をねらいとする授業とを組み合わせることによって道徳的価値の自覚を促そうとするものである。

1 主題

生きることの喜び・尊さ [3-(2) 生命尊重]

2 ねらい

将来において誕生するかもしれない自分の子どもの名前を考えたり、自分の名前に込められた親の思いや願いを知ったりすることを通して、誕生の喜びや生きることの尊さを感じ、受け継がれ、そして受け継いでいく自分の命を精一杯生きていこうとする心情を養う。



写真1 命名体験の様子

3 指導上の立場

(1) 主題について

生命を大切にする教育の重要性については、これまでも強く認識され実践されてきたが、今日の社会状況を顧みると、生命を大切にする教育の一層の充実が求められる。生命の有限性、偶然性及び連続性、そして生命を守っていくことの大切さなど生命尊重には様々なアプローチが考えられるが、生命を大切にすることはもちろんのこと、生命は自分だけのものではなく、ずっとつながり受け継いでいくものであることを知り、自らの生命を精一杯生きていこうとする気持ちを持てるようにすることが重要である。

そのためにまず、自分を大切にし、自信を持って生きていくことができる自己肯定感を育てることができるようになりたい。

(2) 児童の実態について

本学級の児童は、メダカやその他の小動物を飼育する経験から、生命がはかないもので、大切にしなければならぬということ漠然と理解している。しかし、自分のこととして生命の尊さをとらえられている児童は少なく、生命の大切さをしみじみと感じたり、自分の生命をより輝かせて生きていこうとしたりする心情が十分には育っていない。

学級生活においては活発であり、仲良く生活することができる。友達を思いやる様子もよく見られ、一人一人が生活を楽しんでいる。ただし、授業中に自らの考えを積極的に話すことは苦手であり、グループでの話し合い活動においても消極的になりやすい。

そこで、生命尊重について、体験的な活動をしたりグループ活動で意見交換をしたりすることを通して、道徳的価値の自覚を深めていけるようにしたいと考えた。つまり、自分にも与えられた生命があること、その生命は自分だけのものではなく、親から受け継ぎ、また受け継いでいくものであることを理解でき、その上で、自分の生命を精一杯輝かせて生きていこうと感じることのできる学習活動を設定したいと考えた。

(3) 資料について

生命尊重を中心価値とする授業づくりの困難な点は、人の生命にかかわる児童の体験が希薄なことである。体験不足が自分のこととしてとらえにくいことにつながっている。そこで、授業の中で共通体験をすることにより、より明確に自分のこととしてとらえられると考えて、学習内容を構成した。

中心資料として取り組んだ体験的な活動は、命名体験(写真1)である。SGEのエクササイズとして紹介されている「マイ・ビューティフル・ネーム」を参考にアレンジした。

「マイ・ビューティフル・ネーム」とは、グループで自分の名前について思っていることを語り合ったり、名前の由来から、付けてくれた人の願いについて紹介をしたりすることで自分の名前に込められ

たメッセージを理解し、自分への理解を深め、未来への展望を持つことを目標に設定された活動である。

アレンジを加えた命名体験では、一つの生命の象徴とも言える自分の名前について考えるきっかけとなるように、自分の子どもに名前を付けるという活動をする。そして、そのときの思いや感想を実際の親の思いと重ね合わせながら話し合っていくことでねらいに迫れるようにした。このような体験的な活動を取り入れることにより、児童同士の心の触れ合いや感動の共有が期待でき、和やかな雰囲気の中での、活発な話し合い活動も期待できると考えた。

さらに、エクササイズ後に行われるシェアリングと道徳の時間における展開の後段を融合させることを試みようと考えた。

(4) 指導計画

○ 1 単位時間扱い

4 指導の実際

(1) 対象(期日) 総社市立総社小学校児童 第5学年A組 30名(平成17年7月7日)

(2) 本時案(◎は中心発問、以下同じ)

学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指導上の配慮や工夫など
1 命名の意味を考える。 2 命名体験をする。 ・命名する。 ・命名に込めた思いを記入する。 ・発表する。 ・共通点について話し合う。 ・命名した感想を発表する。 3 手紙を読む。 4 振り返る。 5 ビデオを視聴する。	○命名とはどんな意味なのだろう。 ・命に付けられた名前 ○自分が親になったつもりで、命名をしてみよう。 ○その名前を付けた自分の思いについても書いてみよう。 ・△△という願いを込めました。 ・△△のように大きくなってほしいなあと思いました。 ・幸せになってもらいたいと思いました。 ・△△な思いでこのように命名しました。 ◎みんなが付けた名前にはどんな共通点がありますか。 ・思いや願いが込められている。 ・ずっと大切にしてほしいことが込められている。 ・気持ちのいい言葉が多い。 ・精一杯生きていってほしいという願いが込められている。 ・自分の名前もこうやって考えてもらったのかな。 ・自分の名前にもこんな願いや思いが込められていたのか。 ○この時間でどんな新しい自分に出会いましたか。 ○みんなのお家の人もこんな思いで君たちを育てているんだろうね。	・「命の名」という成り立ちから、生命尊重の学習への方向付けをする。 ・丁寧なインストラクションを行って活動開始時には積極的に声を掛け、和やかな雰囲気をつくるよう心掛ける。 ・ワークシートを用意することによって児童の思いを伝えやすくする。 ・どんな思いなのか、どんな願いなのかまとめていく。 ・自分のこととして考えられるようにする。 ・あらかじめ保護者をお願いした手紙を用意しておく。 ・親がどんな思いで子どもたちを育てているかということが余韻として残るものを用意する。今回はA生命保険相互会社のCMを使用した。
評価の観点	○自分や友達の名前に込められた思いについて考えることができたか。 ○自分の名前に込められた思いに気づき、今後の生き方に生かそうとしていたか。	

(3) 事前の準備

自分の名前の由来を知るためには、親からの手紙が有効である。そこで、個々の家庭状況等に配慮しながら、児童全員あての手紙をそろえることができるようにした。本研究では、各家庭に手紙(図3)を配付し、協力をお願いした。

受け取った手紙は開封せず、大切に保管しておく、授業の前には手紙がそろっていることを再度確認した。命名体験後に、それぞれの家庭から手紙が届くという設定にした。

(4) 指導のポイントと工夫

- ① 命名用紙の「命名」という熟語に注目させることにより、生命の学習への方向付けをした。
- ② 命名体験には、真剣な気持ちで取り組むよう告げた。また、命名した理由が発表しやすいよう、ワークシートなどを用意し、記入させるようにした。
- ③ 命名したときの思いの共通点を見付けることで、命名には、命を大切に生きていってほしいという願いや思いが込められていることに気付くよう話し合いを促した。
- ④ シェアリングにより命名したときの様々な思いを引き出した。このとき、自分の思いを一生懸命に名前に込めようとしたことや、命名することの難しさなどを振り返ることにより、自分の名前が付けられたときのことに話を結び付けられるよう心掛けた。
- ⑤ 振り返りの活動では、これまでの生活の中で、自分の名前について考えてみたことがあったか、その中に込められた願いについて思いを巡らしたことはあったか、また、その思いに答えようとしてきたか、このようなことについて素直に自己内省ができるよう支援を行った。
- ⑥ 終末に利用したのは、A生命保険相互会社が作成したCMである。偏見や差別をなくしたい、「命の大切さ」「生きるという意味」を伝えたいといった願いが込められている。本研究では、本社広報部へ連絡を取り、使用許可を得た。

(5) 授業の様子

＜主な発問と児童の反応＞

ア 自分の子どもに命名してみよう。

- ・健太、唯香、静、つくし、など

[当初、多少消極的であった児童も、話し合いをしたり辞書などを持ち出して話し合いを深めていたりする活動の中で、進んで取り組むようになっていった。]

イ どんな思いで名前を付けたのかな。

- ・つらくても、新しい命を大切にし、希望を持って生きていってほしい。
- ・どんなことがあっても負けずに羽ばたいてほしい。
- ・優しく、きれいな心を持ってほしい。
- ・神様に守られて生きていけるように。

ウ みんなが付けた名前には、どんな思いが込められているかな。共通することは何だろう。

保護者のみなさんへ

7月1日

・・・次回の道徳では「生命尊重」の授業をします。自分たちが親になったつもりで、自分の子どもに名前を付ける(「命名」という活動を通して、自分たちもどんな思いで名前を付けてもらったのか、どんなに大切に思われているのかななどを実感し、自分の命を精一杯輝かせて生き抜こうとする心情が育てばと考えました。

そこで、お子様の名前を付けたときのことを思い出して、次のような内容でお子様へお手紙を書いていただきたいと思います。

① 名前の由来、ついた理由・・・私の大切にしている言葉からとったんだよ。こんな意味があるんだよ。等
② 名前を付けるときの苦労や思い・・・あなたをこんなに大切に思って付けたんだよ。等
(これがメインです。これが書かれてあればいいです。)

③ 子どもたちがいる喜び・・・あなたに出会えて本当にうれしいよ。ありがとう。等

④ 子どもたちへの願い・・・この名前のように、精一杯命を輝かせて生きていってほしい。等

※②だけでもかまいません。あなたのことをこんなに思っているよということが感じられれば、どんなに短い文でも・・・

図3 「保護者へのお願い」の一部

- ・生きていくために大切なこと。
- ・どんなことがあっても生きていてほしいという願い。
- ・いつも心に持っておいてほしいこと。

エ 命名してみた感想を教えてください。

- ・はじめは相談があまり盛り上がらなかったけど、途中から面白くなっているような意見が出て楽しく勉強できました。
- ・とても難しくて、お父さんやお母さんの気持ちがよく分かりました。字にも思いを込めたいと思っていたら、10分間では足りませんでした。

オ 今までの自分を振り返ってみて、どう思いますか。

[児童が記入したワークシートには写真2以外にも次のようなものが見られた。]

- ・名前には生きていくために大切なことや、精一杯生きていてほしいという願いが込められていることが分かりました。私は今まで自分の名前について考えたことがありませんでした。私の名前に込められた思いを知ってお父さんやお母さんが付けてくれた名前を大切にしていこうと思いました。これからも家族のためにも精一杯生きていきたい。

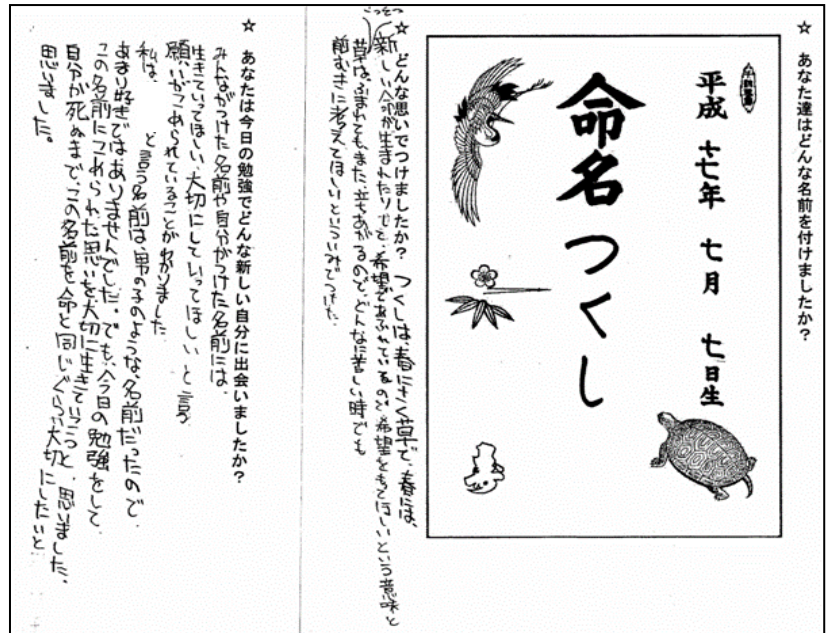


写真2 命名ワークシート

5 結果と考察

ワークシートへの記入内容を分析すると、名前を付けてみたり、自分の名前の由来を改めて知ったりする活動の中で、受け継いでいく生命の尊さを知り、自分の生命を精一杯生きていこうとする気持ちが児童の中に芽生えたことが分かった。そういう意味では、本時の目標を十分に達成できたのではないかと考える。

命名体験の際には消極的な児童のいることも予想をしていた。そのときには、自分の親の手紙に込められた思いと自分が命名したときの気持ちを比べて、素直に自己内省できるように声掛けをしようと考えていた。本実践では、各グループでの取り組みが活発に行われ、充実したものになったように感じる。

本実践では、中心資料として体験的な活動を取り入れた。和やかな雰囲気の中で取り組めたことや、話し合いを深める中で道徳的価値の自覚を深めていったことなどを振り返ると、体験的な活動は道徳の中心資料に十分なり得たと考えられる。

また、シェアリングに当たる部分では、命名の困難さを児童自身が振り返ることで、自分の親のことにまで話題を移行させることができていた。つまり、自分のこととして話題をとらえることができたのである。そういう意味でも、道徳の時間とSGEとの新たな関連性を見い出せたと考えている。

今後は、道徳の時間において体験的な活動を取り入れる工夫を更に探っていくことで、多様な展開や指導方法の工夫を一層追究していきたい。

1 主題

相手の立場に立って親切にしよう [2-(2) 思いやり・親切]

2 ねらい

高齢者疑似体験を行い、日常生活に支障の起きやすいことを知り、高齢者の思いを考えたり交流場面を考えたりすることを手掛かりとして、だれに対しても相手の立場に立って、心を込めて接しようとする態度を養う。



写真3 聴き合い活動の様子

3 指導上の立場

(1) 主題について

思いやりの心は、自分が他の人に能動的に接するときに必要な心の在り方であり、その根底には、人間尊重の精神に基づく人間に対する理解と共感が必要になる。そのため、思いやりの心をはぐくむためには、相手の立場に立って考えてみるのが大切である。また、特定の身近な人たちに対してだけでなく、幅広い人間関係において相手の立場をとらえることも重要である。

この題材においては、身近なところに住む高齢者、障害のある人とのかかわりを通して、一人一人が相手に寄り添い、思いやりの気持ちを持ち、自分にはどのようなことができるかを考えようとする態度を育てるようにしたい。

(2) 児童の実態について

本学級の児童は、友達や下級生などに対しては思いやりの心を持って接することがおおむねできている。ただし、その態度は身近な人たちに限られ、幅広い人間関係において相手の立場をとらえることはまだ十分ではない。

本学級では、当初、輪になって座ることに時間が掛かったり男女が明らかに別れて並ぼうとしたりする様子が見られ、全体としてどことなくよそよそしい雰囲気があった。そのため、月に1、2回程度S G Eを行い、人間関係を促進しようとしてきた。シェアリングの際には沈黙が続いたこともあったが、継続的な指導により、現在は男女とも互いに親しく、自然な会話をするかかわりができつつある。

しかし、授業中の発表は特定の児童になりがちで、友達の意見を聞いて反応を返すことはまだ十分とは言えないため、一人一人が自分の思いをありのままに出せるような学習活動を設定したい。

(3) 資料について

本実践では、この後に高齢者とともに行事に参加し交流する計画がある。そこで、第1時には高齢者疑似体験を行い、第2時には高齢者と接するとき大切にしたいと思うことをランキングし、それを基にグループで聴き合い活動(写真3)を行うこととした。高齢者や障害のある人の立場を実感し、大切にしたいことをランキングすることを通して、だれに対しても相手の立場に立って考え、親切にしようとする態度をはぐくみたい。

なお、「自分がしたいことベスト10」「ダイヤモンドランキングと聴き合い活動」を参考にしている。「自分がしたいことベスト10」とは、自分が現在してみたいことを、心に浮かぶ順に10個書く。それを特に見てみたい順に並べ替え、グループになって一人一人が自分のしたいことを説明したり、質問したりする。全員が終わったところで、グループで感じたことや思ったことを話し合うというものである。また、「ダイヤモンドランキングと聴き合い活動」は、主題について大切にしたいことをランキングし、自分のランキングを基に、グループで聴き合い活動をして、合意形成を図るというものである。

(4) 指導計画 (全2単位時間扱い)

- ① 第1時 高齢者疑似体験用品を装着することによって不自由さを体験し、日常生活で自分の身体の状態と異なる高齢者の心情について、感じたことをグループで話し合い、聴き合う。
- ② 第2時 前時の高齢者疑似体験を想起し、日常生活の中で高齢者と接するとき、自分がどのようなことを大切にしたいか考えたことを話し合い、聴き合う。

4 指導の実際

(1) 対象(期日) 津山市立鶴山小学校児童 第6学年4組 29名 (平成17年11月25日)

(2) 本時案

① 第1時 「高齢者疑似体験」

学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指導上の配慮や工夫など
1 加齢による身体変化を考える。	○高齢になったとき、どのような変化があるだろう。 ・身体能力の衰え、病気やけが	・身近な高齢者のことでも固定観念に基づくものでも、素直に言える雰囲気を中心掛ける。
2 高齢者疑似体験用品を装着し、感想を持つ。	○グループで、交代しながら体験者と観察者の役割をしよう。 ○体験者の言動をよく見聞きしておこう。 ○予想していたことと比べてどうだったかな。 ○用具を外したときどんな感じがしたかな。 ・ほっとした。	・各用品とその症状を説明しておく。 ア 白内障と老眼 イ 聴力低下 ウ 関節や筋肉の衰え
3 体験的な活動についての感想を発表し合う。	◎高齢者はどんな気持ちでいるのだろう。 ・とてもしんどい思いをしている。 ・若かったころに戻りたい。	・日常生活を思い起こし、早くできないと困ること、ゆっくりでもできればよいこと、装着しては無理だと思うことを想像できるようにする。
4 高齢化について教師の話聞く。	○日本は世界一の長寿国であり、今後も高齢化が進むと考えられている。	
評価の観点	○疑似体験で感じたことを積極的に伝えようとしていたか。 ○高齢者の心情を考えようとしていたか。	

② 第2時 「ランキング」

学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指導上の配慮や工夫など
1 本時の目当てを知る。	○高齢者とともに生活する中で、どんなことが大切ですか。	・事前アンケートをとり、集約しておく。
2 伝統行事で高齢者と交流する場面の接し方を考える。	○高齢者と親しく接するには、どんなことを大事にしたいと思いますか。 ・どういう順位にしようかな。	・ワークシートに集約の結果を記入しておく。 ・話し合い、聴き合う際の約束を確認する。
3 各班で意見を聴き合いながら、合意できるランキングにする。	○グループの共同作業でランキングを作りましょう。 ・ランキングは違っていても、その理由は似ている。 ・どっちが大切だろう。	・高齢者がより望んでいることは何かの視点を投げ掛ける。
4 各班のランキングを聴き、傾向について気付く。	◎自分の考えに近いところ、意外に思ったところはどこですか。 ・ランキングがいろいろだ。 ・それぞれ違っていても理由があるんだな。	・高齢者に限らず、だれに対して接するときでも、相手の立場に立つことの大切さに気付けるよう助言する。
5 振り返りをワークシートにまとめる。	○今日の学習で、どんな新しい自分に出会いましたか。	
評価の観点	○高齢者(相手)の気持ちを考えることができたか。 ○だれに対して接するときでも、大切にしたいことについて、自分なりの考えが持てたか。	

(3) 事前の準備

○高齢者疑似体験用品 ○児童の意識アンケート ○ランキングシート

(4) 指導のポイントと工夫

- ① 高齢者疑似体験（写真4）では、高齢者との交流活動を想起させ、面白半分に取り組むことのないようにした。
- ② 聴き合い活動では、「相手の考えを否定しない」「まとめは多数決で決めない」「決まらなければ、迷っているところを説明する」などの約束をし、机間指導の際にも留意した。
- ③ 高齢者だけでなく、だれに対しても相手の立場に立って考えようとする態度につながるよう助言した。

(5) 授業の様子

① 第1時＜主な発問と児童の反応＞

○予想していたことと実際と比べてどうだったかな。

- ・すごく負担がかかっているのが初めて分かった。これがいつまでも続くのは、つらい。
- ・お年寄りの方が転ぶのは何でかなと疑問だったが、ちょっとした段差で転ぶ理由が分かった。本当に足が上がらない。

○高齢者はどんな気持ちでいるのだろうか。

- ・自分も疲れたけど、お年寄りの方はもっと早く疲れるだろう。
- ・歩くたびに友達が手伝ってくれたので、よかった。お年寄りの方は前に倒れそうになることもあるから、すぐに助けるようにしたい。
- ・80歳になってみて、自分一人の生活が始まると思うと不安になった。
- ・道路でお年寄りの方が歩いているのを見て、「じゃま」と言う人がいた。この倒れそうで腰の痛いのを分かってほしいと思った。

② 第2時：聴き合い活動での児童の反応（ア～ケはランキングの項目）

〔どの班からも明るく活発な声が聞こえてきた。各項目については、次のことが出されていた。〕

ア 大きな声で、あいさつをする

- ・あいさつをすると、その後のコミュニケーションをすぐにとれ出す。第一印象が大事だと思う。
- ・耳が遠くなっている人もいるかもしれない。
- ・あいさつをすると自分も相手も元気になるし、うれしい。

イ プレゼントを用意する

- ・いつも会えるとは限らないので、自分たちのことを覚えておいてほしい。

〔それに対して、次のことも出された。〕

- ・相手のことをもっと知ってからにしたい。
- ・話したり聴いたりするだけでも楽しい。お年寄りの方と一緒に時間をもっと大事にすればいい。

ウ よく手伝う

- ・お年寄りの方はあまり力がなくなっていると思うので大事にしたい。
- ・高齢者疑似体験のことを思い出した。自分だったら手伝ってもらえると嬉しい。

エ 自分のことを話して、知ってもらう

- ・互いのことを知ってもらって、親しみやすい関係にすることを大事にしたい。
- ・自分のことを知ってもらうことで、互いを分かり合え、コミュニケーションが深まると思う。

オ 言葉遣いに気を付ける

- ・お年寄りの方に対して失礼なことがあるといけない。



写真4 高齢者疑似体験

[それに対して、次のことも出された。]

- ・あまり言葉遣いに気を付けなくてもいいと思う。その方がもっと親しい感じに思える。

カ 話をよく聞く

- ・自分たちの知らないようないろいろな話を聞いてみたい。

キ 遠慮せず質問して教わる

- ・遠慮ばかりして質問できなかったということにはしたくない。お別れの後、心残りにしたくない。

ク 友達のように接する

- ・あまり友達のように接するとお年寄りの方のことを考えてないようだけど、互いに安心できそう。

[それに対して、次のことも出された。]

- ・友達みたいに接する方がなんだか失礼のような気がする。

ケ 子どもだけで、グループをつくらない

- ・子どもだけだと分からないことがいっぱいある。
- ・子どもだけでグループをつくったら、お年寄りの方がつまらない。

○ ランキングの項目以外にも大事だと思うこと

- ・優しく迎えたりきちんとお礼を言ったりする。
- ・相手のことを思って会話をする。
- ・いつもそばにいれば、お年寄りの方は安心していられる。
- ・お年寄りの方を他人だと思わない。

5 結果と考察

児童のワークシートの記述内容を整理すると、次のようであった。

○大切にしたいことについて

- ・高齢者に対する言葉遣いのことや、友達のような接し方が失礼に当たるかどうかを取り上げることに
より、一人一人が自分と高齢者との間にどのような距離をイメージしているか、その差異を知ること
につながった。また、ある児童は、そのことで「まずは、相手のことも理解してから、普通に接しよ
うと思った」と書いていた。高齢者に限らず、だれに対してもまず相手の立場を理解しようとするこ
との大切さに気付いたようである。

○ランクを付けることについて

- ・ほぼ全員、どれがいいか迷っていた。多くの児童はランクを絞っていく中で「大切なことが一つしか
ないとは必ずしも限らない」と考えるようになった。
- ・ある児童は「ランクを決めるよりは、実際にしめなわ作りやとんどをした方が、勉強になると思う。
早くやってみたい」と実践に向けての意欲を示している。

○話し合い・聴き合い活動について

- ・意見がまとまらないことは、多くの児童が予想していた。
- ・みんな思ったことが言えてよかったとする児童が多くいた。ある児童は友達の言った「自分を知って
もらうのがコミュニケーションだと思う」という意見に納得している。また、「やっぱりばらばらにな
ったけど、○○さんの『お年寄りとお年寄り時間がプレゼントになっているから、プレゼントはいら
ない』という意見がいいと思いました」と書き、友達の意見を聞きながら、同意したり新たな気付き
を持ったりしている。反面、上位になった意見に納得できないと書いている児童もいた。つまり、こ
のような児童には、学習のまとめを書く活動が、異なる意見を反芻し自分の考えを明確にすることに
つながったと考える。

これまでの道徳の時間では、ともすれば少数の児童の発言にとどめてしまいがちであった。体験的な活
動の場面やワークシートを基に本実践を振り返ると、どの児童も真剣に考え、伝え合っていたように思う。
今後は、道徳の時間のねらいにかなう体験的な活動のバリエーションを少しずつ広げていきたい。

1 主題

礼儀の意義と大切さ〔2-(1) 礼儀〕

2 ねらい

職場体験学習（以下「チャレンジワーク」という。）においての体験をカードトーキング（写真5）により想起し、礼儀について話し合い、聴き合うことを通して、時と場に応じた適切な言動をとろうとする態度を養う。



写真5 カードトーキングの様子

3 指導上の立場

(1) 主題について

礼儀の基本は、相手を一個の人格として認め、敬愛する気持ちを具体的に示すことであり、心と形が一体となってその価値が認められる。礼儀は、具体的には言葉遣い、態度や動作として表現されるが、相手のことを思いやり、尊重する気持ちが根底になれば、その意を尽くすことはできない。相手に対して敬愛の気持ちを示すには、まず相手を認め、大切にすることを示す必要がある。また、礼儀をわきまえることによって、円滑な人間関係を築くことが期待される。

(2) 生徒の実態について

本学級においては、明るく元気のよいあいさつのできる生徒が多い。その反面、言動の粗雑な面も見受けられる。また、親しい友達との会話は楽しくできるが、人前で自分の意見を述べることに対しては抵抗を示す生徒が多い。そのため、学級活動や道徳など授業の中での話し合い活動が活発であるとは言い難い。

進路学習としてのチャレンジワークは単に勤労を体験するだけでなく、体験の依頼などの事前学習から、報告会や礼状作りなどの事後学習に至るまで、生徒がふだんはできない様々な体験をすることができる。そのため、生徒たちの中には、期待や不安、喜びや感謝や達成感といった様々な感情がわき起こる。そこで、チャレンジワーク全体を通して、喜びや感謝や達成感といった感情を共に分かち合う機会をできるだけ多く設けることで、生徒の自己肯定感を高めるとともに、礼儀について深く考えさせたい。

チャレンジワーク実施に向けて、地域や事業所の方々の協力に対して感謝の気持ちや、社会の一員として働く自覚を持つという意味では、特に礼儀の大切さを理解し、時と場に応じた言動をとろうとする意欲と態度が不可欠である。

(3) 資料について

読み物資料や視聴覚資料ではなく、生徒全員が共通して体験したチャレンジワークを題材として取り上げた。体験活動全体を考えれば、それぞれ個別的ではあるが、いずれの事業所においても礼儀については重視した指導がなされている。そのため、共有化が十分になされていると考え、読み物資料を用いず、話し合い活動に十分な時間を確保することにした。それぞれ異なった事業所で実際に体験したことを思い出しながら、「礼儀」について考える道徳の授業を行うことにより、生徒たちは多くの体験からわき起こってきた感情や気づきをグループの中で分かち合い、互いに認め合いながら、礼儀の持つ意義とその大切さを実感できるのではないかと考えた。

話し合い活動を促進する工夫としてカードトーキングを行う。SGEのエクササイズとして紹介されているカードトーキングを、道徳の時間の話し合い活動を促進するための工夫としてアレンジしたものである。

カードトークとは、「友達に聞いてみたいこと」「話題にしたいこと」などを記入したカードを用意し、グループごとにカードを裏返し無作為に数回きった後、順番にカードを引き、その質問に答えるという、楽しみながら互いを知り合うことができる他者理解・自己開示のエクササイズである。

また、道徳の授業にカードトークを用いることにより、意見を出しやすい雰囲気をつくるだけでなく、より活発な意見交換を行うことができると期待した。さらに、喜びや感謝や達成感といった感情を共に分かち合うことで、自己肯定感の高揚につながると考えた。

(4) 指導計画

- 1 単位時間扱い

(5) 他教科・領域との関連

- チャレンジワーク（職場体験 三日間、総合的な学習の時間 全12単位時間）の実施後の翌週に行う。

4 指導の実際

(1) 対象（期日） 倉敷市立水島中学校生徒 第2学年2組 38名（平成17年7月14日）

(2) 本時案

学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指導上の配慮や工夫など
1 本時の目標を確認する。 2 礼儀とは何かを考える。	○「礼儀」から連想されることはどんなことか。 ・あいさつ ・敬語 ・堅苦しい ・言葉遣い	・気軽に礼儀に対するイメージを発表できる雰囲気になるように心掛ける。
3 チャレンジワークのことをカードトークで思い出し、班で発表し合う。	○チャレンジワークのことを思い出して、カードトークで話してみよう。 ・はじめは緊張して、まともに顔を見ることができなかった。 ・事業所の方に敬語を使うのは難しかった。 ・幼児や大人など相手によって接し方に違いがあることが分かった。 ・よくは知らない人に接したとき、本当に礼儀を大切にすることの大切さを感じた。	・よかったこと・できたことを認め合うよう助言する。 ・話がスムーズにできるように机間指導しながら、支援する。 ・話すことだけでなく、聴くことの大切さを強調する。
4 話し合いの内容を基に、礼儀に関して大切なことをまとめる。	◎みんなの話し合いから礼儀に関して、大切なことをまとめてみよう。 ・あいさつや返事をきちんとする。 ・私語を慎み、言葉遣い、特に敬語に気を付ける。 ・服装をきちんとする。 ・感謝の気持ちを忘れない。 ・話すときや聴くときは相手の目を見るようにする。	・ワークシートに各自記入させた後に、班で話し合いを行うようにする。
5 本時の学習についての振り返りと気づき、今後の自分についてまとめる。	○今日の勉強でどんな新しい自分に出会いましたか。 ・やっぱり敬語は必要だと思った。これからも敬語を使っていきたい。 ・チャレンジワークでの経験を今後の生活に生かしていきたい。 ・礼儀とは相手を尊重することだと改めて感じた。 ・礼儀とは自らの心の表現につながると気付いた。	・新しい気づきと今後の自分のことをワークシートにまとめるようにする。
評価の観点	○チャレンジワークの体験を思い出しながら、自分の思いを意欲的に話そうとしていたか。 ○みんなの意見を聴いて、礼儀について考えを深めることができ、今後の生活に生かそうとしているか。	

(3) 事前の準備

チャレンジワークの実施に向けて、事前打合せのアポイントメントを取るための電話の掛け方や事前打合せを二人組でロールプレイングすることにより、一人一人が人前で敬語を用いて話すような体験的な活動をできるだけ多く取り入れるよう心掛けた。

また、カードトーキングに用いる質問カード（写真6）の質問内容（図4）はあらかじめ指導者が考え、作成しておいた。質問内容は、生徒が抵抗なくチャレンジワークを振り返り、発表することのできる肯定的な内容のものと、自らを謙虚に内省できる内容のものとの八つに絞った。

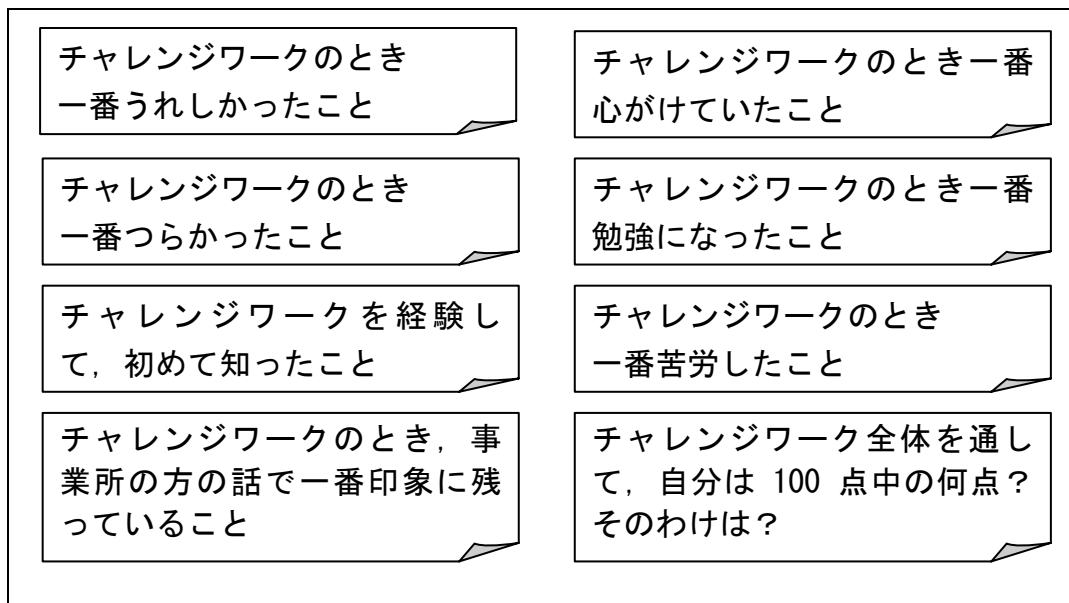


図4 質問内容

(4) 指導のポイントと工夫

- ① 礼儀について考えを深める時間であることを意識付けし、礼儀という言葉から連想されるイメージを発表させ、生徒の意識を方向付ける手だてとした。
- ② カードトーキングのインストラクションは、指導者が実際にやって見せる、聴き方について助言するなど丁寧に行った。
- ③ カードトーキングでの話し手には、チャレンジワークの体験の想起を促しながら、「上手な話し方でなくてもよいので、感じたことを素直に話してみよう」などの声掛けをした。
- ④ 話し手の気持ちを受け止め、認め合えるよう、聴き手の態度には特に留意するよう助言した。特に、話し手の話を真剣に聴かなかったりさげすんだり、あるいは話し手を非難したりするような言動はしないよう確認した。
- ⑤ シェアリング、振り返りや気付きを円滑に行うためにワークシートを利用した。

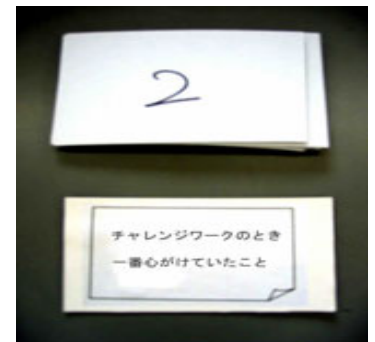


写真6 カードトーキングの質問カード

(5) 授業の様子

<主な発問と生徒の反応>

ア 「礼儀」から連想されることはどんなことか。

・あいさつ ・堅苦しい ・言葉遣い ・敬語

[「礼儀」という言葉からは、敬語、言葉遣い、服装・頭髪など、堅苦しくて窮屈なマイナスイメージを抱いている生徒が多かった。]

イ チャレンジワークのことを思い出して、カードトークで話してみよう。

[はじめは照れくさそうに話をしていたが、次第に和やかな雰囲気になり、うれしかったことや苦労したことなどのエピソードに熱弁を振るったり、それぞれの体験談に身を乗り出して聴き入ったりしている生徒が多く見られた。]

ウ 礼儀に関して大切なことをまとめてみよう。

- ・あいさつや返事だけでなく、服装をきちんとするのも礼儀の一つだ。
- ・時と場に応じて私語を慎み、敬語など言葉遣いに気を付ける。
- ・感謝の気持ちをいつも忘れない。
- ・話すときや聴くときにはその人の目を見るようにする。
- ・礼儀は、相手を思いやる心から生まれてくることに気が付いた。

[ワークシートに記入する時も、また発表する時もふだんよりも活発に意見が出された。]

エ どんな新しい自分に出会いましたか。

- ・言葉遣いやあいさつなど礼儀について、これからは、ふだんから心掛けたいと思った。
- ・今まであまりよい言葉遣いをしていなかったけど、これからはなるべくきれいな言葉遣いをしようと心掛けるようにする。
- ・あいさつや敬語は大切なことだから、改めて気を付けようと思った。また、服装なども気を付けていこうと思った。これからの生活に役立てたい。
- ・敬語や服装は、学校生活でも役立てると思う。チャレンジワークを通して、あいさつや敬語などの大切さが改めて分かった。そして、何より周りの方の温かみが分かった。
- ・今まで礼儀について考えたことがなかった。でも、この授業で礼儀について深く考え、実行していこうという新しい自分に出会った。
- ・周りの人のことを考えることのできる自分がいた気がする。
- ・みんなで話し合っ発表するといろいろな意見が出てすごいと思った。とても勉強になった。
- ・いつもの道徳より楽しく、発表しやすかった。

[文章を書くのがあまり得意でない生徒もじっくりと落ち着いて、新しい気付きや今後の心掛けを書いていたのが印象的であった。]

5 結果と考察

授業後の生徒の感想には、「とても発表しやすかった」「みんなで話し合っ発表するといろいろな意見が出てすごいと思った」など、話し合い活動を促進する工夫として予防的、開発的教育相談の手法を取り入れることに肯定的な意見が多かった。

また、読み物資料は使わないものの、チャレンジワークという全員が直接体験したことを題材として取り上げることで、体験を通しての思いや気付きを比較的抵抗なく、発表できたように思われる。さらに、グループで互いの気持ちを語り、意見を聴き合うことによって、互いの頑張りを認め合うような和やかな雰囲気が感じられた。

そして、「礼儀」について大切なことをまとめる際にも、和やかな雰囲気の中で活発に意見が出され、道徳的価値の共有化、一般化がしやすいようであった。チャレンジワークに限らず、特別活動・総合的な学習の時間での体験活動などを道徳の時間に生かすことにも応用できるという手ごたえがあった。

この道徳の時間後、舞台製作のワークショップ、保育実習及び広島平和学習の場面で、時と場面、相手によって敬語を使ったり、服装を意識したり、笑顔で接したりするなど少しずつではあるが、生徒たちの変容がうかがえる。体験活動と道徳の時間を通して、礼儀を尽くすことの大切さを学習したことが、徐々に定着してきたと考えている。

今後も、生徒一人一人が自己肯定感を高めたり自分も相手も大切にしたりする予防的、開発的教育相談の手法をはじめ、多様な工夫を図ることによって、道徳の時間の充実に取り組んでいきたい。

1 主題

友達の様々な面に気付き、友情を深めよう〔2-(3) 信頼・友情〕

2 ねらい

すごろくトーキング（写真7）により自主班研修活動を振り返り、新たに気付いた友達のよさについて話し合い、聴き合うことを通して、互いの思いや考えを理解、尊重し、更に友情を深めようとする姿勢を育てる。



写真7 すごろくトーキングの様子

3 指導上の立場

(1) 主題について

青年前期における友情のはぐくみ方は、将来の望ましい人間関係を築いていくための基礎になっている。そして、真の友情は相互の信頼や敬愛の念があって初めて成り立つ。互いの持つ思いや考え、あるいは、よいところを認め合いつつ、真の友情やその尊さについて理解を深め、より確かで豊かな友情を築こうとすることが大切である。

ここでは、友達の新しい面や率直な思いを知ることによって、互いについての理解を深め合うことの喜びや楽しさについて考えさせたい。

(2) 生徒の実態について

本学級の生徒は、ほとんど全員が同じ小学校から入学しており、大きな人間関係の変化もなく、比較的落ち着いた環境の中で仲良く生活しているように見える。しかし、多感なこの時期、学校での一番の関心事や悩みは友達との関係であるという生徒が多く、特定の人間関係の中で過ごす場面が多く見受けられる。傷付くことを恐れて本音を口にすることをためらい、互いに自分をぶつけ合うことができないストレスを抱えている生徒もいる。

そこで本実践では、SGEを用いて、自分の個性を相手の前でのびのびと発揮することや、相手の個性をそのまま受け入れ、新たな発見の喜びを感じられるような学習活動を設定したいと考えた。

(3) 資料について

2単位時間の道徳の時間において、話し合い活動を促進するための工夫として取り組んだのは、SGEのすごろくトーキングであり、その活動を踏まえての中心資料は「律子と敏子（中学生の道徳、2年、暁教育図書）」である。

すごろくトーキングとは、班単位などの小グループでさいころを振りながら、出た目のマスに書かれた内容をグループ内で話し合い、聴き合う活動である。

神戸における校外学習での自主班研修活動の振り返りとして、班で協力した体験を単純に振り返るだけではなく、同じ体験を共有したグループ内でも、それぞれがこのような思いで活動していたのかという新たな気付きが出てくることを期待して、自主班研修活動を振り返ることのできるようマスの目を工夫したすごろくを作成した。また、生徒はSGEにまだあまり慣れていないため、堅苦しい雰囲気にならないよう、会話を楽しみながら発言ができ、自然に自分の思いを披露できるような項目づくりを工夫した。

読み物資料「律子と敏子」は、転校生の律子が次の転校までのわずかな間に敏子と友情をはぐくむという内容である。律子は積極的で、敏子とのかかわりを強く持ちたいと望んでいる。敏子はそんな律子の前では自分を思い切り表現しても安心できることを知る。律子がリードする形の友情だが、別れの間

際で敏子は律子の寂しさに思い当たり、自分が律子の前では得ることのできた安心感を、自分から律子へは与えていなかったことに気が付く。友情は、信頼と安心の上に成立することを学べる資料である。

自分を率直に表現できる人間関係やその安心感を味わったり、この読み物資料のねらいにより深く迫ったりするために、S G Eは有効であると考え、二つの活動を組み合わせて取り組んだ。

(4) 指導計画 (全2単位時間扱い)

- ① 第1時 自主班研修活動での様々な思いや考えを互いに振り返り、聴き合うことによって、互いのよさや苦労を認め合う。
- ② 第2時 読み物資料「律子と敏子」を読み、より深い友情の在り方についての考えを話し合い、聴き合う。

(5) 他教科・領域等との関連

自主班研修活動 (特別活動・総合的な学習の時間) 後に実施。

4 指導の実際

(1) 対象 (期日) 岡山市立福田中学校生徒 第2学年A組 32名 (平成17年5月24日, 31日)

(2) 本時案

① 第1時 「すごろくトークン」

学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指導上の配慮や工夫など
1 本時の学習目標を確認する。		
2 班のメンバーと互いのよさを見付け合う。	○「△△君ってどんな人かな」と尋ねられたらどう答えるだろう。 ・面白い ・足が速い	・堅苦しくならず、ゲームを通してリラックスした雰囲気の中で話し合うことを伝える。 ・互いが「○○さんはこんな人」というイメージを漠然と持っていることに気付くようにする。
3 自主班研修活動のことを思い出しなが、すごろくトークンを通して班で発表し合う。	○自主班研修活動のことを思い出して、すごろくトークンで話してみよう。 ・自分のことを人前で話すのは最初は緊張した。 ・あのとき班長はそんなふう考えていたのかと思った。	・話し合いがスムーズにできるよう机間指導しながら助言する。 ・自分の考えを述べたり人の話を聴いたりすることの大切さについて助言する。 ・話し終えるごとに拍手し、互いを認め合う雰囲気をつくる。
4 話し合いを通して、互いの新しい気付きに触れる。	◎話し合いから、互いの新しい面に気付いたことをまとめてみよう。 ・△△さんはこんな人だと思っていたけれど意外な面があると分かった。	・ワークシート記入後に、班ごとで話し合うようにする。
5 本時の振り返りと気付き、今後の自分のことをまとめる。	○今日の勉強でどんな新しい自分に出会いましたか。 ・あまり話したことの無い友達とも思いを分かり合えてよかった。 ・相手がどんな思いでいるのかをもう少し考えようと思った。	・新しい気付きと今後の自分のことについてワークシートにまとめるようにする。
評価の観点	○自主班研修活動を思い出しなが、互いの思いを話し合い、聴き合うことができたか。 ○互いについての新しい発見があったか。	

② 第2時 「律子と敏子」

学 習 活 動	主な発問と予想される反応	指導上の配慮や工夫など
1 自分が友達に対してどのように接しているかについて想起する。	○自分が友達の見解を聞いたり、励ましたりしたことがありますか。	・ふだん自分がどのように行動しているかについて想起を促す。
2 資料「律子と敏子」を読んで、班で話し合う。	○律子はどうして敏子とたくさん話をしたいと思ったのか。 ・敏子と話をしていると楽しいから。 ・自分と全く違う性格だから。 ○律子が度々はがきを書いたのはどんな気持ちからだろうか。 ・敏子に頑張ってもらいたい。 ・一緒に頑張りたいが、言葉では言いづらい。 ◎別れの前に「いいね、敏子は」と言った律子の気持ちはどんなだったろう。 ・敏子に自分の気持ちをうまく伝えられないのがつらい。 ・敏子は明るくていいと思った。	・話し合いがスムーズにできるよう机間指導しながら助言する。 ・常に敏子を励ます側の律子の立場になって考えることを促す。 ・友達として律子は敏子を丸ごと受け止めていることに気付くようにする。
3 律子と敏子の関係から学んだことをまとめる。	○今日の勉強でどんな新しい自分に出会いましたか。	・友情について新しい気付きと今後の自分のことについてまとめるようにする。
評価の観点	○互いの関係において、ふだんは見えない部分があることを感じ取れたか。 ○相手の個性の理解とありのままの受容は信頼や安心につながるものが学べたか。	

(3) 事前の準備

- すぐろくやワークシートの作成

(4) 指導のポイントと工夫

- ① すぐろくは、ゲーム的な要素を持つ指示と、研修中の自分の思いを語る指示とのバランスを取り、話しやすい内容を考えて作成した(写真8)。特に、1～6のマスは、神戸での食べ物についてや既に振り返った項目など、話しやすいものにした。
- ② 神戸での自主班研修活動で協力し合った班の雰囲気を想起するよう促し、率直に話し合えるようにした。
- ③ 話題がそれてしまったり必要以上に話し込んでしまったりしていたときには早めに切り上げるよう助言し、停滞気味のときには話題となりそうなきっかけを与え、振り返りを促した。

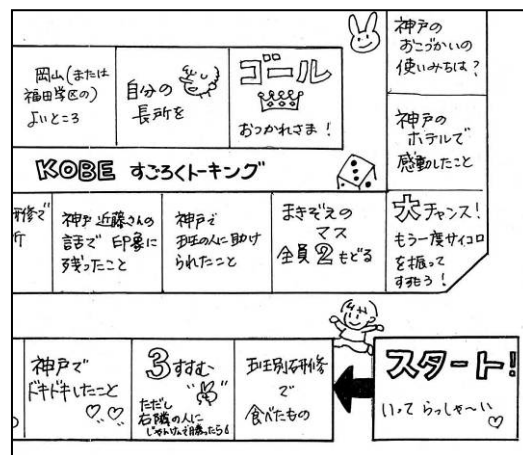


写真8 作成したすぐろくの一部

(5) 授業の様子

【生徒の振り返り】

第1時 「すぐろくトーキング」

- ・ふだんあまり話をしない人の考えを聴くことができてよかった。
- ・普通に行事の反省をするよりも、話し合いで面白く振り返ることができた。
- ・神戸の自主班研修活動では班長とけんかしたけれど、班長は時間に遅れたらみんなが注意されると思

って必死だったことが分かった。

- ・地図係の人がすごい緊張してみんなを誘導していたことが分かった。ありがとう。
- ・神戸での〇〇さんたちが面白かったことをまた思い出せてよかった。
- ・〇〇さんが意外に優しくったり楽しかったりすることが分かった。
- ・よく知っているつもりの人でも知らない部分があったり、自分の中にも新しい面が生まれたりしたように思う。

第2時 「律子と敏子」

- ・律子も、全然タイプの違う敏子のようになりたかったんじゃないかな。友達をうらやましいと思うことってよくある。
- ・律子はすごい。友達を丸ごと受け止めるのは、すごく難しいけれど、受け止めてもらえるには自分も考えないといけないんだなと思った。
- ・いつも一緒にいるときは明るい友達も、きっと一緒にやっているときにいろいろ悩んだと思うのに、私は相談にのってあげたり声を掛けたりすることができていなかった。
- ・道徳の時間に班での話し合いはあまりしたことがなかったけど、それぞれ友達関係で考えているんだなと思った。

5 結果と考察

SGEについては、私自身がこれまで、単発的に学級活動の時間で幾つかの活動に取り組んだことはあったが、ねらいをあまり明確には意識せず、「仲良く話し合いができるように」といった程度で行っていたように思う。そして、活発に活動はできるものの、生徒の心には「楽しかった、またやりたい」といった程度のゲーム的な感覚しか残っていないのではという思いがあった。そのため、道徳の時間に予防的、開発的教育相談の手法を導入するという今回の研究の趣旨に、当初は懐疑的であった。

しかし、授業後の生徒のワークシートには、「班でのすごろくは話しやすかった」「普通の授業よりも道徳でいろんな意見が出た」という感想が見られるなど、すごろくトークングをすることによって読み物資料での道徳の時間に広がりが見られた。

また、神戸での自主班研修活動という共通の体験を基にすごろくトークングを行ったため、体験活動の振り返りとしても、生徒が活発に話し合える雰囲気づくりとしても格好の活動になった。だからこそ、話し合いの深まりから、第2時の読み物資料での話し合いも和やかな雰囲気の中で行うことができたのではないだろうか。

予防的、開発的教育相談の手法を道徳で用いることについて、当初は果たして本当に道徳的価値の自覚を深められるのかという不安があった。しかし、今回の授業実践を行う中で、第1時のSGEによるすごろくトークングでの温かい雰囲気が第2時へのつながりを生むとともに、その中で生まれた互いへの気付きが、読み物資料の律子の思いへの気付きを深めることにつながるという、二つの効果が生まれたように思う。

今後は、この授業実践で得たことを生かし、道徳の時間の中で予防的、開発的教育相談の手法を活用したり新たな試みを工夫したりして、生徒にとって「楽しい」「ためになる」道徳の時間を実現していきたい。

V おわりに

本研究では、小学校高学年・中学校において道徳の時間の充実しにくい原因を探り、道徳の時間の多様化に向けての三つの視点を得た。そして、授業改善のため、その三つの視点から予防的、開発的教育相談の手法を活用する工夫を検討し、指導上の留意点を明らかにした上で具体的な活用事例を提案した。

本研究を通して、児童生徒にとって「楽しい」

「ためになる」道徳の時間の実現を図ること、その基盤となるものは、教師と児童生徒、児童生徒同士の人間関係であることを改めて強く感じた。また、道徳教育と予防的、開発的教育相談が、互いに補完し合うことによって児童生徒の豊かな人間性をはぐくむ心の教育が一層充実するとも考えている。

今後も、明るい未来づくりに向けて、教師も児童生徒も「共に考える」道徳教育、そして心の教育の充実に向けて微力を尽くしていきたい。

○引用文献

- 1) 文部科学省：道徳教育推進状況調査の概要，中等教育資料，12月号，ぎょうせい，p.114，2004
- 2) 金井肇：道徳授業の改善の視点，道徳教育，4月号臨時増刊，明治図書，p.13，p.18，1997
- 3) 文部省：小学校学習指導要領解説道徳編，pp.76-79，1999
- 4) 永田繁雄，広瀬仁郎：研究授業小学校道徳高学年，p.7，明治図書，2004
- 5) 前掲書3)，p.17
- 6) 文部省：中学校学習指導要領解説道徳編，pp.16-20，1999
- 7) 天笠茂，広島県呉市立五番町小学校，二河小学校，二河中学校
：公立小中で創る一貫教育4・3・2のカリキュラムが拓く新しい学び，pp.2-5，ぎょうせい，2005
- 8) 安彦忠彦：6-3制を4・2-3制へ，早稲田大学大学院教育学研究科紀要第14号，p.8，2004
- 9) 川島一夫：発達を考えた児童理解・生徒指導，p.13，福村出版，1997
- 10) 國分康孝：エンカウンター，誠信書房，pp.225-242，1981
- 11) 諸富祥彦，齋藤優：エンカウンターで道徳中学校編，p.20，明治図書，2002
- 12) 岡山県小学校道徳教育研究会：第11回中国地区小学校道徳教育研究大会資料，p.13，2003

○参考文献

- ・ 藤田昌士：道徳教育その歴史・現状・課題，エイデル研究所，1985
- ・ 國分康孝：エンカウンターで学校が変わる小学校編，図書文化社，1996
- ・ 諸富祥彦：道徳授業の革新「価値の明確化」で生きる力を育てる，明治図書，1997
- ・ 國分康孝：エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集，図書文化社，1999
- ・ 諸富祥彦：学校現場で使えるカウンセリング・テクニック（上），誠信書房，1999
- ・ 押谷由夫，宮川八岐：道徳・特別活動重要用語300の基礎知識，明治図書，2000
- ・ 村田盛一：人間賛歌の道徳教育，日本教育新聞社，2001
- ・ 嶋崎政男：教育相談基礎の基礎，学事出版，2001
- ・ 國分康孝：エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集Part 2，図書文化社，2001
- ・ 文部科学省：小学校心に響き，共に未来を拓く道徳教育の展開，2002
- ・ 文部科学省：中学校心に響き，共に未来を拓く道徳教育の展開，2002
- ・ 押谷由夫：小学校道徳基礎・基本と学習指導の実際，東洋館出版社，2002
- ・ 一丸藤太郎，菅野信夫：学校教育相談，ミネルヴァ書房，2002
- ・ 栗原慎二：新しい学校教育相談の在り方と進め方，ほんの森出版，2002
- ・ 深澤久：道徳授業原論，日本標準，2004
- ・ 宇井治郎，吉澤良保：人間理解と道徳教育，日本文教出版，2004
- ・ 國分康孝：構成的グループエンカウンター事典，図書文化社，2004

- ・ 諸富祥彦：小学校ころを育てる授業ベスト17，図書文化社，2004
- ・ 諸富祥彦：中学校ころを育てる授業ベスト22，図書文化社，2004
- ・ 横山利弘，宇井治郎：中学生の道徳2自分を考える，暁教育図書，2005
- ・ 岡山県教育庁人権・同和教育課：人権教育指導資料Ⅲワークショップ下，2005
- ・ 諸富祥彦：道徳授業の新しいアプローチ10，明治図書，2005
- ・ 岡山大学教育学部附属小学校：教育研究発表会資料，岡山大学教育学部附属小学校，2005

○W e b ページ

- ・ 坂本哲彦道徳・総合の授業づくり (<http://sakamoto.cside.com/>)
-



FAX用紙（所員研究係行き）

岡山県教育センター研究紀要をお読みくださり、ありがとうございました。皆様の御意見を、今後の所員研究や学校支援の改善のための参考とさせていただきますので、次のアンケートに御協力ください。

岡山県教育センター研究紀要に関するアンケート

研究紀要第272号 小学校高学年・中学校道徳の時間における教育相談の手法の活用に関する考察

1 あなたの所属はどちらですか。

県内：小学校, 中学校, 高校, 盲・聾・養護学校, 大学, 教育機関, その他()

県外：小学校, 中学校, 高校, 盲・聾・養護学校, 大学, 教育機関, その他()

2 本書を何で知りましたか。

- | | |
|------------------------|--------------------|
| (a) 岡山県教育センターからの送付 | (b) 岡山県教育センターの所報 |
| (c) 岡山県教育センターのWebページ | (d) 岡山県教育センターの研修講座 |
| (e) 岡山県教育センター所員研究成果発表会 | (f) 他の先生等からの紹介 |
| (g) その他() | |

3 本書の内容についての御意見・御感想をお聞かせください。

- (1) よかった点, 教育実践に役立つと思われる点について記述してください。

- (2) 工夫, 改善すべき点について記述してください。

4 道徳教育や教育相談に関する研究に、今後どのような内容を取り上げてほしいですか。



御協力ありがとうございました。
このページの写しをファクシミリで下記へお送りください。
FAX 086-272-1207 岡山県教育センター所員研究係

平成16・17年度岡山県教育センター個人研究
道徳・教育相談協力委員会

協力委員

長尾 路子 岡山市立福田中学校教諭
中田 和子 倉敷市立水島中学校教諭
(前倉敷市立郷内中学校教諭)
吉川 達也 総社市立総社小学校教諭
仲矢 昌史 津山市立鶴山小学校教諭

なお、岡山県教育センターでは、次の者が本研究に当たった。

二部野 進 教科教育部指導主事
野崎 誠二 教育相談部指導主事 (主査)

平成18年2月発行

研究紀要第272号

**小学校高学年・中学校道徳の時間における
教育相談の手法の活用に関する考察**

編集兼発行所 岡山県教育センター

〒703-8278 岡山市古京町二丁目2番14号

TEL (086)272-1205 FAX (086)272-1207

URL <http://www.edu-c.pref.okayama.jp/>

E-MAIL kyoikuse@pref.okayama.jp